

桜井の昔語り

小川勉編

桜井を懐き故里

とする人々に贈る

はじめに

旧正月の元旦に金鶏が鳴かなくなった。

狐もだまされなくなった。丑の時まいりのなくなった。天狗もガタロも現れなくなってから久しい。それらの存在理由を見出してやるのは、むずかしいが、存在したのだという証明だけはしてやりたい気持ちになつて、桜井市についての既刊の書物から集めてみた。

まだまだ市民の人々の心の中に眠っている話も多いであろう。自由な時間がなかったので、目を覚まさせにまわることはできなかったが、これを機械に教えていただければと思います。

歴史、史実には、あまり興味を示さず、気ままに自分の気に入ったものだけ集めたもので、全体として伝説、昔話だけでもないので、「昔語り」とした。

「日本書紀」「古事記」「万葉集」「懐風藻」「謡曲集」(岩波古典文学大系)「桜井町史」「桜井町史統」「郷土」「大三輪町史」「大神神社資料」「大和の伝説」「風俗誌」その他からの引用も多いので、ここでお許しを乞いたい。

なお、米田富恵氏、米田一郎氏、その他の諸氏の協力をえたので、この機会に合わせて感謝の意を表します。

文体、ことば遣いも、ばらばらであるが、強いて統一しなかったことを最後に断っておきたい。

小川 勉

(桜井市西本町三丁目)

目次

◎ 伝説の部

桜井の地名の起源	……………	(桜井)	1	高田の刀塚	……………	(高田)	38
鬼からの木	……………	(桜井)	3	花筐	……………	(池の内)	34
万年青の流行	……………	(桜井)	3	土蜘蛛	……………	(高家)	39
吉野ダブのガタロ	……………	(上の宮)	4	雷の落ちないところ	……………	(山田・下・忍阪)	40
こんにやく橋の石	……………	(川合)	5	蛇を押さえている石	……………	(粟殿)	42
西阿の妄念	……………	(戒重)	6	三輪山の神	……………	(朝倉)	43
訳語田の舎	……………	(戒重)	7	赤猪子	……………	(黒崎)	45
文殊院の文殊菩薩像	……………	(阿部)	20	龍谷長者	……………	(龍谷)	49
安倍晴明	……………	(阿部)	23	野見宿弥の墓	……………	(出雲)	50
七ツ井戸	……………	(阿部)	25	迹鷲洲	……………	(白河)	52
開発で消えた山(小碓山)	……………	(阿部)	28	衣通姫	……………	(忍阪)	53
阿部の祭文言いの角さん	……………	(阿部)	30	鶴の塔	……………	(粟原)	65
青木寺の泥かけ地藏	……………	(橋本)	31	松尾の長者屋敷	……………	(粟原)	66
				聖林寺の子安地藏尊	……………	(下)	68
				京観田	……………	(橋本)	33

楠掘山のふっくり (今井谷) 70

音羽と黒崎の印相 (音羽・黒崎) 71

六万ヶ谷 (八井内) 71

天狗杉 (初瀬) 72

未来鐘 (初瀬) 74

曾我地藏 (初瀬) 75

塗りつぶしの絵馬 (初瀬) 77

龍野 (和田) 78

天狗 (白木) 78

泊瀬斎宮 (小夫) 81

寝地藏 (小夫) 84

蓑丸長者 (笠間) 85

神々の祭礼 (三輪) 86

三輪神婚説話 (三輪) 88

三輪山の猿 (三輪) 90

三輪上人慶円 (三輪) 92

三輪童子 (三輪) 93

金の鎧の落武者 (三輪) 95

五十鈴媛の命 (茅原) 96

玄資僧都(玄資庵) (箸中) 98

箸墓 (箸中) 101

海柘榴市 (金屋) 104

丑の時参り 祈り釘 (芝) 114

弘法大師の井戸と作物 116

金鶏伝説 118

◎お国自慢(地名唄ひこむ唄・名所唄) 122

◎迷信 126

◎お伽話の部 130

こぶとり・猿蟹合戦

桜井の地名の起源

(谷)

履中天皇三年十一月六日、帝が両枝船（二艘をつなぎ合わせた丸木船？）を、前年に作られた磐余の池に浮かべられ、皇后黒媛と別々にお乗りになり遊宴を催されました。

膳臣余磯（あれし）はお酒を奉った時に桜の花びらが、帝のお持ちになっている杯に散り落ちたのでした。

帝は、この季節はずれの桜の花に驚かれて、物部長真膳連を呼んで詔をされました。

「この桜の花、時季はずれに咲いた桜は、いったいどの桜か調べてこい。」と。

長真膳連は、ひとり花を尋ねられ、掖上の室山（御所市室）に咲いている桜の花を見つけられ、帝に献上されました。

帝は大変珍しがられて、自らの宮を磐余雅宮桜と名付けられました。

そして、花を見つけあてた長真膳連に雅桜部造御酒を奉った膳臣余磯には雅桜部臣と姓をお与えになりました。

そして、その長真膳連は、詔を奉じて掖上室山から桜樹を移し、等弥郷の清水の湧

き出る泉のほとりに植え、桜井田連男祖にこれを監視させられました。歳月が移り、皇居もしばしば変わり、桜の木もわからなくなつた。

その跡に桜井寺が建てられたが、戦国争乱で寺が焼け、わずかに草堂一つを残すのみになつたが、桜井の清水は千四百年を経た今日でもこんこんと湧いていると言う。

（権僧正公算の「桜井清水碑」よりの引用）

同じ文政の頃の藤堂藩士入交太郎左衛門の「桜井茶話」に

「この桜井の里に小さき井戸がある。かたわらに桜の木が一本ある。桜井と言う名水だという。
（大和志に桜井は桜井谷村）

西行法師の歌に「・・あらおもしろの桜井の水」というのは、ここで詠んだものと里人が誇り伝えているが、大和には桜井というのは二、三か所もある。」として、たんに桜樹のかたわらに清冷甘味な清水のあふれる井泉「桜の井」という名水があつたのを桜井の地名の起源だとしている。
（日本書紀、桜井町史による）

鬼がらの木

(桜井)

鳥見山の麓を東の方へ行くと、昔、そこに大きい森があったんやそうや。

周囲五メートルもあるような杉の木がたんよあったんやと。

そのころ、毎晩、ここに青い火が見えたんやそうや。付近の人は、この火を見るとみな怖がって戸を堅とう閉めてんと。

ある晩、十二時ごろに村中の牛がみな鳴き始めてんと。翌朝、おそるおそる牛に餌をやるに行くど牛が見えへんねと。そして骨だけになって森の大木に掛かったんやそうや。

そやさかに、鬼がら森というど子供だけでなく、大人も身ぶるいをしたそうや。

(大和の伝説による)

万年青の流行

(桜井)

明治十五年頃、万年青(おもと)の盆栽が流行して、雑物でも一株十五銭以上、龍

物は、一円以上で売買され、その後、はやらなくなったが、二十二、三年頃、再び流行した。これは行商人が山師のはやらしたもので、あくどい手にかかった者もいた。

桜井町の軍医の中川義正氏は七、八百円の損をして倒産の憂き目に遇った。仁王堂の森田新七氏は、金龍丸という万年青を三百円で買い失敗した。安倍の高田の高岡長四郎氏も同じ憂き目にあつたとか。当時、米一石で十一円、十三円ぐらいの時代である。

夏の暑い時、倉の中の涼しい所で、万年青の葉をぬれた布でふき、汗をふきながら、うちわであぶっている人もいたと父から聞いたことがある。

土田野だぶのガタロ

(上の宮)

池などにガタロと言うのがいて、人を沈めて血を吸うものだと言う。

吉野だぶという深みが河西の上にあつて、よく泳ぎにいったが、昔、牛が深みに引き込まれたとよく聞いた。

両岸、崖になり川巾が狭くなり、深かった。上手に井戸があると言われた。

確かに一ヶ所、特に深みがあったが、ガタロなどもういなかった。
ガタロとは河童のことらしい。

こんにゆく橋の石

(川合)

川合の西の方に、栗原川を渡って、北へ行く道がありますねや。

小さい川に石橋が架っていて、今でもありますわ。

この橋を、こんにゆく橋といいますね。なんで言うのか、そんなんわからしまへんけど。

昔、推古天皇の頃、唐の使いと日本の人が口論して、決着がつかんかったようですね。

「せやったら、力くらべをして決めようやないか。」ということになって。

唐の使いは、三輪山のとっぺんへ登って、大きな石を相手のいるとこめがけて放ったんやと。そしたら、川合のここんとこにいた人が、持っていた棒でたたき割ったんやと。

さすがの唐の使いも頭を下げて、あやまらばったんやそうや。その割れた石の一つがこのこんにやく橋で、ほかのは「よのみ」の木の横へ置いたんやそうや。

また、推古天皇が、この川合坂をお通りになるのを、三輪山からねろてた唐人が、天皇さんめがけて大石を投げつけたんやけど、家来が、この石を軽う手で受けとめて、よのみの木の、根かたへ置いたんやともいいますね。よのみの木は、一里塚やかへ、よう植えて道の目印にしゃはったようで、今は、こんな道やけど、人の行き来があつてんやろな。

ひよっとしたら、戒重の宮さんのとこ、昔の訳語田の舎のあつたとこやと言いますし、最近、石井繁男はんが、大福に小墾田があつたんやと言ってやはるさかいに、そんなとこへ通じるにぎやかな道があつたのかも、わからしまへんな。

(桜井町史・大和の伝説等による)

西阿の亡女念

(戒重)

毎年旧の七月十三日。(あるいは三日)

お盆の晩には、近くの村では、みな早う戸を閉めて寝ることになってますねや。

というのはね。その夜は、極楽寺の墓地にある玉井西阿の墓から火の玉があがってな、戒重の城の方へ向かうんや。

戒重の城からも火の玉が現れて城を守り、二つの火の玉が盛んに戦うんやと。

家来の火の玉も、たんと出て争うんやと。

これはな、南朝方についた忠臣玉井西阿が戒重城で、せんど敵を悩ましてんけど、

七月三日の夜、敗れて戦死しやはってんや。

その妄念の火の玉や言うんやて。

(大和の伝説による)

訳語田の全口

(戒重)

天武天皇が崩御されて一と月も経たぬ十月二日、大津皇子は太子草壁皇子に対する謀反の罪で捕らわれ、三日、この訳語田の舎で死を賜ったのでございます。

あまりにもはや過ぎる処刑と言えるのでございます。なお共犯の八口朝臣權・壹伎

連博徳・大舍人中臣朝臣麻呂・巨勢朝臣多益須は、皇子に欺らかされたとして無罪。美濃の礪杵道作は伊豆に流刑。新羅の沙門行心は、罪するに忍びずとて飛驒の国の伽藍に移されて、一応事件の決着を見たのでございます。

無罪になった中臣麻呂、巨勢朝臣多益須は、事件のほとぼりのさめた三年後には政界に復帰しており、老伎連博徳は、持統帝の末年に律令編纂に加わっているのでございます。

まるで大津皇子の取り除く悪夢のような事件だったと申せるのでございます。

もともと、大津皇子とおっしゃる方は、身体容貌ともにたくましく、人品（度量）が高く奥深く幼年より学問を好み、博学にして、詩賦の起こりは大津皇子からだと言われるほどの文才に長けておられたのでございます。

また、剣の道にかけては、右に出るものがなかったと言われるほど武の道でも秀れたものをお持ちでございました。

ご性格は、かなり放逸な所があり、規則に拘束されない。おおらかなものをお持ちで、人と交わる時にも、偉そぶらず、他人を大切に礼遇されるので、皇子を慕う人が多くございました。

また言葉が、はきはきとして、その賢明さが表れていて、天武天皇も非常に可愛がられたのでございます。

天皇は、草壁太子の順和な弱々しきよりも、ご自分の若い時のような大津皇子を、こよなく愛されたのでございます。

恋愛一つにいたしましても、太子と皇子の間には、明らかに差違のあることを認めざるを得ないのでございます。

日並皇子（草壁皇子）が、愛する才媛石川郎女に贈られた歌に、
大名児を彼方野辺に刈る草の

束の間もわれ忘れめや（万一一〇）

がございます。

大名児を束の間も忘れられないという凡庸なお歌なのでございます。

それに引き比べ事もあるうに同じ相手に大津皇子が贈られた歌に

あしひきの山のしづくに妹待つと

われ立ち濡れぬ山のしづくに（万一〇七）

約束をたがえて、来なかつた石川郎女をとがめて、立ちつくしたので、山のしづく

に濡れてしまいましたよ、と歌われたのでございます。その返し歌に

吾を待つと君が濡れけむあしひきの

山のしづくに成らましものを（万一〇八）

なんとなれなれしい心の通い合った二人の歌いぶりでございますよう。

私を待ってお濡れになったその山のしづくになって、すっぱりあなたを包んでしまいたいですわ。というのでございます。

媚びを含むなまめかしさを感じさせるものでございます。

この恋の軍配は、大津皇子に上がったのは言うまでもございません。

恋には、とかく口やかましいものでございまして、当時陰陽道の大家、津守連通が占って見ると二人は、すでにねんごろにしているという結果が出たのだと言いふらす者までございました。

占いでそんなことまで判ろうはずもないのですが、占師にかこつけて、すでに大津皇子を尾行する者がいたと思われるふしもあるのでございます。

大船の津守の占に告らむとは

まさしに知りてわが二人宿し（万一〇九）

ああ占通り、我らは床を共にした、それがどうだと言うのだ、と歌われたのでございます。

物にこだわらない、明るいご性格は、いいのでございますが、石川郎女にとりましても、あの疑い深いあの野皇后（持統天皇）のお耳に入れば、どのような解釈をされるか知れたものではないので気が気でなかつたのでございます。

文才、武道の才にかけては、皇太子草壁皇子の比ではなかつたのでございます。

この持ち前のおおらかさは詩賦にも表れていたのでございます。

衿を開きて靈沼に臨み、目を遊ばせて金苑を歩む。

澄清苔水深く庵暖霞峰遠し

驚波絃の共響り 唳鳥風の興聞ゆ

群公倒に載せて帰る 彭沢の宴、誰か論らはむ

（春苑ここに宴す 懐四）

衿を開きくつろいで御苑の池に臨み、春色に目を楽しませて御苑を逍遙する。

澄んで清らかな池の苔の水は深く、暗くぼんやりと霞のかかった峰が遠くに見える。

御宴に参加した諸公は酔いつぶれて、さかさまに車に乗せて帰るといふ有り様だ。

このようであるから詩と酒にふけた彰沢の県令陶淵明の催したような酒宴さえも、この宴に比べると論ずるに足らない。と歌われておりますし、また遊獵の五言律詩に朝に扱ぶ三能の士、暮れに開く万騎の筵。

鬪を喫みて俱に豁卒盞を傾けて共に陶然なり。

月弓谷裏に輝き、雲旌嶺前に張る。

曦光己に山に隠る、荘士しましく留連れ。(懐五)

朝に技能のある官人らを選んで獮に出、暮れに馬に乗った数多の勇士らを集めて酒宴を開いた。獲物の切り肉を食べて、皆なが共に心も朗らかになつた。酒盃を傾けて共に心地よく酔つた。

狩りのための弓は谷間に輝き、旗は嶺を背に張りめぐらしている。

日の光は、すでに西の山の端に隠れたが、狩りに来た男達は、帰るのを忘れて、いましばし、ここにとどまって、酒宴を楽しもうではないか。

なんと勇壮な心いきでございましょう。

また、日頃の志を述べるとして、

天紙風筆雲鶴を書き

山機霜杼葉錦を織らむ (懐六)

天のような広い大きな紙に、風のように自由に筆を動かせて、雲をかける鶴を描き、山を機として、霜を横糸にして、紅葉という美しい綾錦のような詩句を織りたいものだ、とも歌われているのでございます。

また、

経もなく緯も定めず少女らが織れる

黄葉に霜な降りそね (万一五一二)

縦糸も横糸も定めず天のけがれなき乙女らの織った黄葉の綾錦に霜よ降らないでおくれと、鬼の心さえも動かす琴線のこときこまやかさも、大津皇子はお持ちだったのでございます。

その健康さ、若さが、皇后の猜疑心をとがらせることになったのに違いございません。

大津皇子は、皇位に望みなど髪の毛ほどもお持ちじゃございません。その自由なおらかな宮廷での生活ぶりが、皇后には、かえって無気味なものと感じられたのでございましょう。

天皇の健康は思わしくなく、神仏に祈願すること数多あったのですが、その験が見えなかつたのでございます。

そんな時、皇后には「史記」に出て来る「呂后」のことが、思い出されるのでございました。

秦と楚の項羽を破って天下を取った漢の高祖と呂后のことでございます。

呂后のただ一人の男子孝恵は高祖の太子なのでございましたが、その人柄は仁弱、高祖は「我に類せず」として愛情を示されず、すぐ下の異母弟如意を可愛がられたのでございます。呂后のあせりはひと通りではございません。

高祖の死後、我が子の皇位の安泰のため、如意を召して毒殺、のち母の戚夫人をも殺すという話なのでございます。

一人静かにも思いにふけられる時、決まってそのことが、目の前にちらつき、自分が呂后であるかのごとき、錯覚に襲われたのでございましょう。

自分も呂后の思いきった手段を見習わねば、とうてい太子草壁皇子の地位も安泰ではないと思われるのでございます。

天武天皇の御病気が重くなればなるほど、大津皇子は、自分の身近に監視の目が光

るのを感じられたのでございます。

そんなある日、ひそかに伊勢の斎宮にいる姉の大来皇女を訪ねられ、自分の追いつめられている立場をかきくどかれたのでございます。

幼少の時に母太田皇女、実は皇后の姉君なのでございますが、なくされて、本当に心おきなく話せるのは、姉君だけであったと思われるのでございます。

もし謀反の企てを持っての相談で姉君に会われたのだとするならば、伊勢で弟君の大津皇子を送るのに、あんな惜別の悲しみの漂う歌は、不吉になるのでございませう。

そうです。弟の身に不吉なものが迫っているながらも、何のほどこす手立てもない歯がゆさ情けなさが表れているのでございます。

わが背子を大和へ遣るとき夜深けて

曉露にわが立ち濡れし (万一〇五)

二人行けど行き過ぎ難き秋山を

いかにか君が独り越ゆらむ (万一〇六)

二人は永遠の別れを考えられていたのでございませう。露に濡れながら、いつま

でも弟君を見送られる姉君のいじらしい姿が見られるのでございます。

まだ明けやらぬ闇の中に、駒の音だけを残して消えて行かれた弟君、黄泉の国に、弟君が引き込まれたのではないかとさえ思われたのでございましょう。

せめて付いて行ってやりたい、自分が自由な身でありさえすれば、と思われたのでございます。

飛鳥に帰っても、大津皇子には心の晴れぬ毎日が続きました。

天武八年五月、吉野の離宮で、天皇自ら襟を開かれて、六皇子を抱きかかえられ、一同吉野の盟いをしたのも、どこへやら、大津皇子には、まだ父みかどの胸のぬくもりが、ついさっきのように感じられてくるのでございます。諸皇子の自分を遠ざけようとする様子が、とみに感じられるようになられたのでございます。

天武十五年、朱鳥元年九月九日、天武帝は崩御され、それと同時に大津皇子、皇太子に謀反をしようとする紀に書かれていますのでございますが、皇后が、前々からの計画を実行に移そうとされた時でございましょう。

それから一カ月経たぬ十月二日、まず、川島皇子の密告で、大津皇子の謀反が露見することになったのでございます。

懷風藻の編者も、謀反があれば、正すのは良いが、親友を正さないばかりか、泥水炭火、つまり水火の苦しみに追い込んだのは納得できないと言っているのです。

飛鳥では、まともな取り調べもなく、訳語用で処刑されることになったのです。

橘道から磐余道に引き立てられ行く途中、磐余の池の堤で、

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや雲隠りなむ (万四一六)

自然にくやし涙がとめどもなく流れて来たのでございましょう。

「我れ全らしらず」と言っただけで死んでいった有間皇子のことも思い浮かべられていたかも知れません。才あって生まれたばかりの不幸を自らに言いかけられたやとも思うのでございます。

金鳥西舎に臨らひ、鼓声短命を催す

泉路賚主なし、此の夕家を離りて向かふ

(懷七)

これは訳語用での臨終の絶句でございます。おん年二十四才。

あまり急な処刑に大津皇子の妃山辺皇女は、髪を振り乱したまま、素足で大津皇子の亡骸に取りすがられ、自刃されたのでございます。見る者皆な涙を流したのは言うまでもございません。

急を知らされて、姉君大来皇女は、伊勢の斎宮から馳せ参じられたのでございますが、弟君の言ったことが、あまりに早く、あまりに惨たらしい形で振りかかって来たのでございます。

二カ月前、伊勢で皇子を見送った時の若やかな笑みが目の前に浮かんで来るのでございます。また、皇子の瞳から流れた涙のひとしずくを白布でぬぐうてやった時の弟の艶やかな顔、その温かみがまだ手に残っているように大来皇女には感じられるのでございました。

都に着かれた大来皇女は、

神風の伊勢の国にもあらましを

なにしか来けむ君もあらなくに (万一六三)

見まく欲りわがする君もあらなくに

なにしか来けむ馬疲るるに
(万一六四)

と歌われたのでございますが、都の中では、打ちとける人のない寂しさをいやと言うほど味わわれたのでございます。

いましばし天皇の御命の永くあったなら、このようなことにはならなかったのにと、口惜しさのみが、つのるばかりでございました。

やがて、二上山に大津皇子は改葬され、春も巡って来たのでございます。

磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど

見すべき君がありと言はなくて
(万一六六)

うつそみの人にあるわれや明日よりは

二上山を弟世とわが見む
(万一六五)

最後の歌の中には、大来皇女のこの世での生活の決意のようなものが、うかがえるのでございます。

いずれにしましても、あまりに賢き才ある者の悲劇が終わったのでございます。

そして永い歴史の底に静かに沈んで行ったのでございます。

その終焉の地をここ戒重とする。現在の春日神社と言われている。

日本書紀、懷風藻、万葉集（日本古典文学大系）、古代国家の成立

（直木孝次郎）を参考にする

文殊院の文殊菩薩像

（阿部）

仁明天皇の御代承和元年と言いますさかい、今から、千百五十年も前のことですわ。この安倍山から巽の方角に高くそびえている音羽山がありますねや。そこにな、一つの岩屋がありましたな。

ある日のこと、急に空が、えろう曇って来て、天から金色の光が降って、その岩屋に落ちたんやそうですね。

大きな音を立てて、山が崩れ、池が裂けるかと思うくらいやったと言いますさかい、よっぱどの音やったんやと思います。

あたりの村の人は驚くし、安倍の在所からも、よう見えたそうです。

村の男も女も皆んな遠くから拜んだそうです。

夜になれば光らしたんで、あれはありがたいもんに違いないいうて、信心ごころ

を起こさはって、直接この目で確かめたいという人もおりましてんけど、目がつぶれるかも知れへんというて、さわがしいことやったようです。

渴仰の上でのことや、ばちも当てはらへんということになって、その千石窟に信仰深い人が行かはったんですわ。

一心にその光を放つ元を捜されたんですやろ。

そうすると、黄金の姿の一寸八分の文殊聖像が岩屋の一番奥に立ってられたんやそうです。

みんな、えろ喜ばはったそうや。その時、その像にさわらはった人は、生きている人間のように温かかったと言うていたそうや。

それで、崇敬寺（安倍寺）へお移ししゃはったということです。

当時、真雅僧正という坊さんがやはって、寺の北の方に新しい御堂を作って、文殊像を安置してそのお堂を満願時と言うたんやそうです。

その後、承暦、貞応にかけて、遷覧、慶園という聖僧がいやはって、えろ法灯も盛んやったそうです。

今ある文殊菩薩像は仲恭天皇順徳院の御代の承久二年に運慶の弟子の快慶が、この

寺に来やはって、身の長九尺という文殊菩薩像を彫らはって、前の石窟から出現しやはったという黄金の文殊聖像を眉間にはめ込まれたそうです。

そやさかいに、この菩薩さんには白毫がないんですわ。

身は黄金に輝いて、宝髻は高く結われていて、童子のようなご様子をされ、五仏のいらっしやる宝冠を載き、慈悲深いお顔にはにっこりと微笑みをたたえておられるんです。

右手に知剣を持たれ、左手には蓮華を持って青蓮の台にのられて、大獅子王の上に座ってられるんです。

その端正で威厳のあるご様子、彩色は美を尽くし、ありがたさはまたとないと言われ、知恵の文殊さんとして知られてますね。

正月の初詣ででの人もたんと来やはって、高校や大学の合格の祈願で日曜などはにぎわいます。

遠方からも御札や祈願する人が、最近では特に増えているそうです。

三月二十五日の文殊さんの日には、満願の御札のお参りでにぎわいますね。

(安倍寺来由記ほかによる)

安位伯晴明

(安倍)

安倍文殊院の池の東側の高台に、安倍晴明天文観測の地というだれが立てやはったのか、標柱が立っています。

清明は大同類聚第三十六によりますと、摂津の国島下の阿部臣広津麻呂の家の方や
そうで、清明は安倍の御主人の後裔、父は大膳大夫益材、母は藤原保憲の娘となつて
おり、天慶七年（九四四）三月辰日に生まれ、幼名は、希名安倍童子と言ひ、後の名
を保名と改め、天文陰陽の大家であると書いてあります。平家物語に陰陽道頭安倍安
親が出て来ますが、あれは、清明五代の苗裔やそうです。
また、カラト古墳は清明の墓やという伝説もあります。

色氣づいたか桃山の土の舞台に清明の岩屋

井戸に影さす桜井戸

という俚謡もあります。

その安倍晴明にこんな話がおまんねや。

安倍保名（やすな）父の益材？が恋人を失った悲しみに物狂いになって泉州篠田

の森にさまよい込んだんですわ。

何で泉州へ行ったんかということになりまんねんけど、大阪の安倍野なんかも大和の安倍とかかわりのあるものとして名が残ったんやと思いますし、安倍の保名という人物も古代の安倍一族の流れをくむ、大和の安倍に起源を持つ人達ですさかいな。

その時、狩人に追われた雌狐を助けたんですな。そして雌狐が報恩のためにのちに、葛の葉姫、妖艶きわまらない美女となって、保名のもとに現れるんです。

そして二人は、契りを結んで童子をもうけることになるんです。

その童子が五才になったある日のことです。庭の乱菊の美しさに見とれて、葛の葉姫は狐の本性を現してしまったんです。

童子は驚き叫んで、母に追いつがるんですけど、母の座、妻の座を捨てて立ち去ってしまおうたんです。

その時、障子に一首の歌を残したんですわ。

恋しくば訪ね来て見よ

和泉なる篠田の森の

裏見葛の葉

と。

のちに童子は、母恋しさのあまり、篠田の森を訪ねるんですな、そこで金の小箱と一箇の水晶の玉を受け取って帰って来たんです。

そして日本の天文暦一占い、まじない、占星術を始めるんですわ。

「あやし」「あやしきすべ」の元祖に成長するんです。

人間には、すでに失われてない、野の獣だけが持つ、遙かな距離、あるいは未知への予知能力、察知力とか、いわゆる野の獣だけが持つ本能的なあやしい力を、獣と人間の血の入り混じった安倍晴明が、持つことになったんですわ。その天文観測の地が文殊院の池の横の高台だというんですわ。

(米田一郎氏による)

七ツ井戸

(安倍)

今、木材団地になってますとこに「石の川」と言いましてね。山口の金物屋からずつと来る。あそこあたりに川があって、その川が吉備の方へ流れていましてん。

安倍寺の跡とあれとの間に七ツ井戸公園ができてますね。あこ、石の川、石の川と

私ら子供の時分ゆうて、阿部からちよつとこつちへ来ますのに下がってましてん。

低なつて、またこつち坂になつて橋本へ来ますね。あこが怖かつたんですわ。タヌキやキツネでるとか言うて。

その石の川は水がとてもきれいで、なんぼ日焼けてほかのとこ、川に水が無うても、あそこの所湧き州がありまして、ちよつと湿つた泉みたいになつて、そこんとこからじょうたり湧いてましてん。ほいで、その水が吉備の方へ流れて行ってましてん。

昔、遣唐使、あの安倍の仲麻呂がこの辺におられて、安倍仲麻呂の娘さんを吉備真備という方にお上げになるのに、「何もこしらえはようせんけど、女は一生水が難儀やから水に不自由せんように、この七ツ井戸を上げよう。それでここの水はほかの方へ流さんと吉備へ流すようにしたんねで。」

というて、それを持たせてやらはつたそうですわ。

その水は冬でもいつでも絶えず流れてましたんで、この水はきれいで、その石の川という所に蛭（シジミ）もよけおりましてね。私ら取んに行きました。

それから、そこに芹がようできて、その芹がほかのとこの芹より特別香りが良かった、石の川の芹がね。

水は手ですくって飲んでもええような水でしてん。その川が吉備に大臣薙があり、吉備真備の住んだはったとこか知りまへんな。そこんとこへ流れていくという話がありますね。

昔、膳夫の膳夫姫とゆうて、聖徳太子のおきさきになられた方やそうですね。

飛鳥の都へ野菜やとか食料を集めたり、持って行ったりする仕事をしてい、貧しい家の娘さんやったそうで、非常に賢いお方やったそうで、親孝行で、七ツ井戸は芹がよう上がり、水がきれいで芹の香りが特別高こうて、ええていうて、膳夫姫が七ツ井戸に芹を摘みに来ておられた時、ここを聖徳太子が通られたんです。

聖徳太子が、ここの橋街道から磐余道を通って、上之宮へ行く途中やったかも知れまへんな。

村のみんながその行列を見てたそうですけど、姫だけが見向きもせんと芹を摘んでやはったんですと。

聖徳太子が「あれは何と言う者か。」と聞かれて、その理由を聞かれると、「わたしの母は、わたしに芹を摘んで来いと申しましたが、太子様の行列を見よとは申しませんでした。」と答やはったそうです。そして家来がああ女の人は、こう言う人やと

いうと、太子はえろう感心され、顔がきれいな方やったし、賢く思われて、それで太子のきさきになられたんやと聞いてます。

香久山小学校の校歌の中にも出てますし、膳夫に子孫やという人がいて、その時太子から一町四方の屋敷をもらうたので、今でも貰田という地名が残ってるらしいです。その貰田家では、姫の木像を祭っているようです。

(橋本、米田喜恵、福井清太郎氏による)

開発で姿を消した山 (小碓山)

(阿部)

その石の川のちょっとこっち側に「オウス山」というのがありますね。字は「小碓山」普通「オボシ山」と言いまして、それには御陵参考地という立札が掛かっていましたん。

あれ掘らる折に、ダンプでなにしやはる時に、何も出えしまへん。何か出るかわからへんと思てましてんけど。

個人の所有の四軒ほどの藪やらありましてん。うちも東から南の方、うちのもので、

竹藪も孟宗がようけで、旬の子もできるし、南側は日受けがようて、大根でもええのできてねエ。オボシ山、オボシ山、言うて、あこまで登りましたら大和三山一望の下に見えて、北の方すつきり見えますやろ、ほんでん、北の高い山行かんかて、あこへ登ってね。ちょっと山登りしたり、弁当広げたりしたらええゆうて子供の時分行きました。

そんな名前の岡がありましたん。なんぼほどでございますやろか、学校の運動場ほどですやろなあ、上の方の平たさは。

岡でしてん。山やのうて。

あんなとこへ土持って来やはってんやろか、山のできること違いますね。田の真ん中ですね。

上の方運動場ほどありましてんけど、あんなものダンプで、ペアとしたら、一日一晩でどこやら行ってしまいました。

そのの向かい側に小さい時から、今もあります。阿倍の墓があります。

阿倍の墓山から小碓山へ狐の嫁入りするやってん、そこで提灯ようけ並べて行っこんねんというてねエ、狐の通り道やったんです。

そんでん、石の川が古怖かったんです。

夕方遅なったら迎えに来てもらわんと騙されると言っただけ、恐かった。あこちよつと低いですし、家一軒もないし、私ら、あこ通る時、心経唱えて通らんと頭痺れる言うて、騙されると言うたもんです。

ようあんな時分、狐に騙されたひともありましてん、精神的にだまされはるのか知りませんけど。

(米田富恵氏による)

阿部の祭文言いの角さん

(阿部)

阿部の祭文言いの角さんいう人が、ええ天気やいうのに雨降ったるいうて、泥芋の葉な、傘やいうて持って歩かかった。

あんなしつかりした人でも狐に騙されはんのか言うたりしましてん。

また高家の方でね、いま道ようなってますねけど、えらい坂道のとこへね、桶屋はんが、森井さんのお父さんの時分に桶屋はんが行って、遅なって帰ったら、道の端の木のとこに奇麗にお白い塗った新チヨウチヨウの別嬪さんがやはんね。それが心ら悪

いね、ゲラゲラ笑はるよってん、狐が騙しとんね、そんなとこ来やはることあらへん言うてな。

そんな時、狐の騙した話、騙された人もありました。それは、ほんまに騙したのか、知りませんけどね。

(橋本 米田富恵氏による)

青木寺の泥かけ地藏

(橋本)

お地藏さんの横に青木山と言う山があるんですわ。そこに青木本坊と言うて奈良朝時代か、もっと古い時代か寺があつて、そこが火事で焼けたんかなんかで、そのの仏さんを、一番上の池へ火災で放り込まはったんか、はまらはったんか知らんけど、避難されてその中におられて、それを今池の端に立てられています。

それは伝説として、父からよく聞いてまんねけれど。

あのお地藏さんは、池にはまったはったさかい、あの池の土が好きやねと、土を塗ったげると、顔に瘡できたたら、瘡のできたる所へ土塗ったげたら、よう利いてくれはんね。

そして土の団子を供いといて、一週間とか二週間とか決めて、そしたら、その間に治して呉れはったら、ほんまの団子こしらえて、お礼参りしたらええね。

その地藏さん、あんまりようできものやら瘡やら、まあ瘡が一番、赤ん坊の間、ようできましたわなア。昔はようできましたわ。

瘡できた時によう利いてくれはるので、それで、よう方々から参ってくれはって、あんな山中やけど参りはたら、あのどっからやら知らんねけど遠いところから来て参って手ぬぐい供えてくれはんね。

あんな山中でも、あんなにまいてくれはるのやってん、ちょっと街道へ出したら、もっとよけ参ってくれはるやると、村の方の話し合いになって、そんなんやったら、もっとこっち持って運んで行こと言うて、そして小さい道でんねけど、大八車に載せて、村中の人寄って運んで来やはったそうですわ。

私らの父の子供らの時分か、もっと昔か知りませんが、今、お寺あるところから、重とうて動かしまへんと。

それで知恵のある人が、これはなあ、地藏さん。あの池の端が好きやね。それで他所行くのいらんねと言わはんね。そんでん、元の所へ返して、あこの泥塗ったげたら、

ええね、返そやないか。

あこまで引っぱって来んのなかなか大そうで、だんだん重とうなって動かへんかったのに、軽々であの向こうへいなれてん。

あのお地藏さんは、なんぼ大勢参ってくれはったかて、こっちへ出さらへんね。あんな山の中やけど、あの池の端へ置いとくね。

(米田富恵氏による)

京観田

(橋本)

私が思てるだけかわかりませんが、今、私の家の前の道の向側の道をずっと行たら小房の観音さん行きますね。

池尻通って、池尻へ行くまでの中ごろの、村のはずれにね、そこからちょっと下ったって米川に掛ったる橋がありますんですけど、そこへ行くまでのとこに京観田という田がありますね。

あこちょっと高いし、藤原京があこから見えたんだと思ってます。

そういう田の、田の字名があります。

膳夫のどこ、ちょっと高いですけど鴨公のどこまっすぐでしょう。

昔からそう思っています。

(米田富恵氏による)

花筐 (花籠)

(池の内)

この「池の内」と言いますのは磐余の池の内と言う意味です。

その池の畔と思われるのですが、昔、朝倉の黒崎あたりに都をお作りになられた武烈天皇のあとを継がれた継体天皇の磐余王穂宮があったそうです。

その帝と言いますが、応神天皇の第五代の子孫に当たられて、もと福井県の味真野という所にお住まいになっていて、その時大迹部の皇子と申し上げたのだそうです。その時、日頃御寵愛なさっていた照日の前と言う女御がおりまして、それはお美しい方だったそうですが、休暇を願い出て実家の方へ帰ってられていた間に、急きよ皇嗣として白刃の矢を立てられて、大和へ来られたのでした。

皇子は照日の前が気がかりなものですから、日頃皇祖天照大神に天長地久と皇子が、

朝ごとに御祈りになり、花を手向けられていた形見の品である花籠とそれに添えて玉章（たまむさ）を照日の前のもとに御届けになりました。

そのお手紙には、「私は応神天皇の血を受けてはいるものの帝位につくほどの身ではないのに、祖神天照大神をおがみ申し上げたので、神の御利益があったものか群臣より選びだされて、遠い都の宮中に誘われて行く、けれども、袖触れ合い仲良く眺めた月影のように、しばし雲居に隠れても、すぐ相まみえることができるであろう。秋を楽しみにしていてくれ。きっと信じていてくれ。」と書かれていた。

急な出立のあわただしさの中で、自分のことを忘れず思い出して花籠・玉章まで下されたことを感謝し、帝位につかれたことを心からお喜び申し上げるのです。

照日の前はそれを見るにつけ、この数年間、お仕えた時の事が、なつかしく思い出されるのですが、女の身から考えれば、文だけを残して再び合うことのできぬ遠方に去られ、一人取り残された自分の身がしみじみ悲しく思われて来るのです。またそんなにも大和は遠かったのです。

皇子と共に住んだ時でさえ、寂しかった山里に残された悲しさよと、形見の花籠と玉章を持って、ひっそり里で過ごされたのです。

春が過ぎようとしていた頃から約束の秋まで、照日の前にはどんなにか永い月日だったことでしょう。

北陸道に秋の気配が感じられると、女の身とは言え、供一人を連れて出発されたのでした。

大和の方角も判らず、雁がねを見るにつけて、雁は南に行くといわれているのを頼りに、また、昔、蘇武の旅雁が手紙を届けたという故事もあります、手紙だけでなく我が身もあのいとしい帝のもとへ連れていかれよかし、と飛立たんばかりの心持ちで旅を続けられたのでした。

その旅はお召しのあつての旅ではなく、帝に合えるかどうかも判らず、天上の人に恋こがれている、浮舟のような自分の身のはかなさが、しみじみと感じられ、恋い焦がれて流す涙に衣もよごれ、思わぬ別れののち、心も落ち着かず、友を呼ぶ秋の鹿の寂しさが身にしみ、起き伏しにも思慕の情がつるばかりで、秋草を分け、野を歩き、山路を歩き、ようやく、大和の玉穂の宮に着くことができたのでした。

ちょうど、九月、まだ紅葉の色浅い初秋、帝の御幸に出合いました。

帝の御幸の行路の露払いに出合いました。

旅に疲れた照日の前のみすばらしい姿と田舎者らしい立ち振る舞いは狂女と思われ
ても仕方ありません。

「御幸の邪魔だ。」と露払いの宮人に払いのけられて、あの形見の花籠を打ち落と
されてしまいました。

そこで照日の前は、

「そもそもこの花籠は、帝が皇子の身であられて、味真野にお住まいになられてい
た時、毎朝自らの手で祖神に花を手向けられた、その馴れ親しまれた品であり、この
ようなかっこうも帝のため、ここに来てまで、帝のおられる都とは申せ、ちらっとさ
えもお姿を見ることもできず、邪魔だといわれるのですか、水に映る月を取ろうとす
る猿のごとき、むなしき恋をしなければならぬのですか、理不尽と申せましょう。」
と泣き伏すのでした。

「それでは、一つ舞を舞って見よ。紅葉狩りの座興の一つにもなるう。」と言われ
るのです。

照日の前は、帝のお車の近くで舞うのを機会に、一目なりともなつかしく恋しい帝
の御容顔なりともお目にかかれぬわけでもないと思ひ、美女で誉れ高かった李夫人と

その死別を悲嘆し、恋焦がれた漢の孝武帝の曲舞と、故き人の姿も現れると言う友魂香の故事にちなんだ曲舞をお見せ申し上げたのでした。

その舞いは切なる照日の前の帝への心をあらわしたものであったのでした。

その舞いを御簾の陰から見られた帝は、その花籠を見せよとの御宣旨がありました。見れば、懐かしい疑いもなき田舎での手に慣れ親しんだ花籠、秋にはきつと迎えようといっていた約束を思い出されて、召し使おうと言われたのでした。

ありがたい花籠と申せましょう。雲上との隔ても溶かした立派な花籠だったと言えます。

その照日の前は、のちに照日の宮とも筐の女御と申し上げたようでした、安閑天皇の生母となられた方だとも申します。

(謡曲 花筐より)

高田の刀塚

(高田)

高田のなんでも、お宮さんのうしろの方に刀のたくさん入った塚かなんかあったん

ですな。

掘ったら刀がなんぼでも出ましてね。あこが大きな声で言われませんが、神武天皇の都を初められたとこやったと、参考地にもなって、だいが参考の書類もあって、宮内省へ明治の初めに出されたようです。

それが、西口宮司さんですが、権原の方からお出しになったのが早かって、もうあこに決まったあとやったそうです。

そやから、その書類は返えらしませんでんと。それであこなんにもならなかったそうです。

(米田富恵氏による)

土蜘蛛

(高家)

高田なり高家なりには、岩星がたんとございますね。

昔の土蜘蛛の住んでたところ、だいがあります。

私ら、あんまり行ったことありませんけど、植松へんでも。

それは、神武天皇東征の時分に、もうここらに昔住んでたアイヌか昔からいた人か

知りませんが、そんな人らみな岩屋にたいなところ掘って住んでましてんやろ。それは高家にもございますし、そして阿部かて、阿部のお宮さんの下に大きな洞窟に泥棒が来て、あこでバクチいっばいすんねて言うて、私ら子供の時分恐かったです。

(米田富恵氏による)

雷の落ちないところ

(山田・下・忍坂)

昔、安倍村の山田寺の井戸に雷が落ちた時に、観音さんが井戸の蓋をして閉じ込めてしまわれたんです。

雷は井戸の中から

「これからは、決りて落ちませんさかいに許して下さい。」と泣いて頼んだんで、蓋を取って逃がしてやらはったんです。

それからは、山田に雷が落ちなくなったそうです。

(風俗誌による)

昔、下の聖林寺に、大心和尚と言う徳の高い坊さんが、やはって、お寺に泥棒が入っ

ても、その坊さんが錫杖を出すと、どんな泥棒でも、たちどころに足が動かんようになつたそうです。

ある年の夏のことです。ちょうど和尚がお堂でお経をあげてられている時に、突然、稲光がしてこの寺に雷が落ちたんやそうです。

和尚さんは、えらい怒らはって、錫杖で雷の頭をぼんとたたかれたんやそうです。よっぽど痛かつたんですやろ、それから下村には雷が落ちんようになったんやそうです。

(桜井町史より)

忍坂の石位寺の東の方に小高い丘があつて、大きな藤の木があつたんやそうです。昔、ここんとこに雷が落ちたんやそうです。天神さんが、すぐこの雷を捕まえて、えろ怒らはって、その雷をその藤の木にしばらくつけやはつたんです。

雷は天神さんにあやまって、二度とこの地に雷が落ちなくなつたんやそうです。

(桜井町史より)

蛇を押さえている石

(粟殿)

粟殿の行者川の堤を東の方へ行き、国鉄の線路道を越えるところあたりを「丁字田」と言いますね。また「石の本」とも言いますねけど。

そこに畳半枚ほどの石があるんですわ。

この石を蛇を押さえたる石やといいますね。

それは、三輪山は千も谷があるくらい大きいんですけど、この山を七まわり半もぐるぐるまいている大蛇がいるんやけど、この大蛇が、いたずらせんようにと、この石で大蛇の尻尾をおさえたるんやというて、この石にさわったり動かしたりしたら、きまって、何か判らん腹痛になるんやといいますね。

また、粟殿が凶作で困っていた時に、三輪山の中腹の谷から、突然光って音もなく飛んで来たんやとか、天から落ちて来た石やとも言うて、さわると手がやけどして、命がのうなるんやとも言うね。

凶作というても洪水のことやろな、昔、初瀬川の氾濫で困らったんで、こんな話が出来たんと違うやろか。

雨は、龍やら蛇の仕業や、石で押さえといたら洪水起きんやろということやろな。

(桜井町史による)

二 三輪山の神

(朝倉)

雄略帝という天皇さんが、黒崎あたりに宮を置かれていたそうですが、ある時側近の少子部の連のスガルを呼んで、おっしゃったそうです。

「おれは三輪山の神の姿を見たい。お前は力も勇気もあるので、一人で行って捕らえて来い。」

これにはスガルも困りはてたそうです。

何を言うても三輪の山の神の姿など見たことがありませんし、天皇のお顔を見ても冗談でもなさそうな様子ですし、若い盛りの天皇の眼は、きらきらと光っていたそうです。

あとで言いますが、去年には、天皇さんにさんざんな目に合わされておりますので、スガルは十分気をつけてかかぬと思いました。「三輪山の神は蛇の御姿と聞いており

ますが。」と申し上げると、「そうだ、九百九十九谷あるというから、そのいずれかにいるはずだ。きっと大蛇であろう。」

「大蛇は恐ろしくはありませんが、何分神様のことですから。」

「そうだ、おれはそれを所望しているのだ。」

「試みに行つて捕らえてまいりましょう。」

にっこり笑われた光艶のあるお顔は、満足を現しておられるご様子です。

スガルは、さっそく、身を清めて三輪山に登りました。三輪山だけあってたくさんの蛇がおりましたが、小さなものには目もくれませんでした。

何日目かに、スガルは大蛇に出合いました。これこそ、三輪山の神のお姿と思ふほどの、今まで見たこともない大きな蛇です。

その大蛇を捕らえて、黒崎の宮まで持ち帰り、帝に奉りました。

帝が、スガルが行っている間、身を清めてお待ちになられてなかつたためか、じかに触れようとされたためか、突然、その大蛇のまなこは、きらきらと輝りかがやき、稲妻が宮殿を取りかこみ、雷の音がとどろき渡りました。帝は、大蛇にお触れにならなかつただけでなく、見もなさらずに御殿の中に隠れてしまわれました。

しかたがないので、スガルは、三輪山へ大蛇を放ってしまいました。

天皇さんは、二度と神のお姿を見たいなどとはおっしゃいませんでした。

その時に少子部のスガルは、雷という名前を帝から賜ったとか。

その前の年に、スガルに「国中の子供を集めて来い」と言われたのです。さっそく集めて来ますと、「蚕を集めて来いに行ったのだ」と、おっしゃって、「どうせ集めて来たので、自分で世話をせよ。」と言われた。その時の子供達の泣きわめく声、今から考えてもぞっとするとスガルが臣下に言われたとか、それで、少子部連と姓を賜ったとか、いう話です。

（雄略七年七月三日の話「日本書記」）

赤猪子

（黒崎）

雄略天皇は、朝倉の黒崎あたりに宮殿を持たれていた天皇です。

ある時帝が、野遊びに出られて三輪川の方まで来られました。

その時、河で衣を洗っている童女（娘さん）を見られました。

その容姿は、大変美しくきれいであったので、帝はその童女に尋ねられました。

「あなたはだれですか。」

娘に名前を聞くのは求婚の意味です。

「私は大神（おおみわ）朝臣の別れである引田部の赤猪子と申します。」と言われ
ました。

帝はその美しさに

「汝は、身を慎み、他人の嫁にはなるな、その内に我が妃として迎えよう。」とおっ
しゃって宮殿にお帰りになりました。

赤猪子は、帝の御命令を守って待ちに待ちました。こちらから帝に申し上げるのは、
はしたないとも思いましたので、じっと待ちました。待っているうちにとうとう八十
才になってしまいました。

罪な話もあるものです。あたら青春を待つことで、自分の美しさを人に見られぬよ
うに、家に閉じ籠もって過ごしてしまいました。

そのようにして、赤猪子は、帝からお召しの御命令を待っている間に年月が経って
しまい、美貌も消え失せて、姿体も瘦せ衰えてしまいました。

今さらお呼び寄せがあるはずがない。

それでは自分が、あまりにも可哀想だ、せめて今までお待ち申し上げた情だけでも、帝に知っていただかないと、自分の気がおさまらないと思って、おびただしい聳への引出物を持参して宮中に参上し、奉った。

ところが、帝は前の事を忘れて、

「汝は何という婆さんか、何をしに来たのか。」とおっしゃった。

「これこれの年のこれこれの月に帝のお言葉をいただき、以来、大命へおおみことをお待ち申し上げて今日に至りました。とうとう八十才を過ぎてしまいました。

容姿は、老いさらばえて、今さら何の帝を引きつける魅力もございませんが、せめて、わたしの志だけでも申し上げようと思ひまして、参上いたしました。」と赤猪子は申し上げました。

帝は大いに驚かれて、

「我は先の事を忘れてしまっていた。

汝は命令を待って、いたずらに、若い盛りを無駄にしてしまわれた。大変すまぬことをした。」とおっしゃって、心では結婚してやっても思われるのですが、そのあま

りの老醜さに、決心がつきかねられた。そして歌を贈られた。

引田の若栗栖原 若くへに率寝てましもの

老いにけるかも

(若い間に妻としていたらよかったのに残念だ)

赤猪子の泣く涙は、着ている赤い丹摺りの着物の袖をすっかり濡らしてしまいました。
た。

御諸につくや玉垣 つき余し

誰れにかも依らむ 神の宮人

日下江の入江の蓮 花蓮

身の盛り人 羨しきろかも

と歌われて、多くの禄を、その老女赤猪子にお与えになって、お引取りねがったとい
うことです。

(古事記より)

龍谷公伝長考

(龍谷)

現在、龍谷の寺のうらに長者屋敷があり、西野氏宅が建っている所が、長者屋敷と言うんだと当家の主婦の話である。

その屋敷の下の竹藪に長者の井戸があって旧正月元旦の朝、金の鳥が鳴くと聞いているし、長者墓があって、そこあたりの垣内の五、六軒の墓地になっている。墓地がある位だから、確かに長者さんはいたと土地の人は言う。金がありすぎて、穴を掘って埋めていたと言ふことも言われている。

しかし、どういう人であったかについては何の伝承もない。

ただ長者にまつわる話として、長者の家の仏壇が売られ、その仏壇を買うと貧乏になるといふ話がある。その仏壇は点々として三輪のF氏に買われたが、その家は貧乏になった。また朝倉のT氏が買ったが、貧乏になると困るので売ってしまったということである。

また、慈恩寺に正木(しおき)という字名が、宇陀が辻にあり、昔、罪人の仕置場であったとし、竜谷長者もここでお仕置きされたと伝えている。

黒崎の藤本登氏によれば、正木で何故だか判らないが、お仕置きを受け、通りがかりの人々に竹のノコギリで体の部分、手足などを切らせたと聞いているということである。

江戸時代末期のことであると彼は言うので、何かさしさわりなどがあって、伝承が消えてしまったのか、土地の人が、「長者屋敷」というと笠間の長者のことですか。」と言う所から見れば、養丸長者伝説が、山づたいにこの龍谷まで動いたのかも知れない。

とにかく、はっきりと判らないのが、この龍谷長者である。

大和の伝説、山岡老女（黒崎）、藤木登氏、桜井町史による。

大木良造氏（黒崎）

野見宿弥の墓

（出雲）

これは、明治の六、七年の頃、出雲のあたりに、わりに大きな円墳があつて、その上に玉垣をめぐらし、五輪塔がありました。

これが野見宿弥の墓だと伝えられておった。現在五輪塔は十二柱神社にある。

宿弥は当麻ノケハヤと天覧相撲で、日本の相撲の開祖と言われている。

難波相撲や江戸相撲の花形が、お伊勢詣、長谷詣の往き帰り、立ち寄って祈願したようですね。

そうすると当時、お相撲など、まさに時代のトップスターなので、土地の民衆が、お相撲の顔を見に走ったんだそうで、勢いまわりの田畑を踏み荒らすので、その田畑の所有者が困って、ついに田畑をこぼって田圃にしてしまった。

この時の石棺の石材は、その土地の所有者の家の庭にある。

その時、古墳にぬっていた朱が、横のコマ川から初瀬川に流れ込んで、数日の間、初瀬川を朱に染めた。

墓石は、今もその土地の地下に埋もれていてその場所だけ田圃の水はけが悪いのだそうです。
(古老の見聞譚である、米田一郎氏による)

迹驚淵

(白河)

龍山の池とも言うてな、近くに八大龍王の一つである善女大龍王を祭る高龍神社

(高山神社) がありますねや。

昔、天武天皇が治政八年泊瀬に行幸されて迹驚淵で宴を催したと日本書紀に書かれていますのが、ここなんですわ。

ここの池は、昔は沼でな、安政の時代に堤を切って、現在は用水池になってますねや。

面積は二七〇平米ほどあって、どんな日照りでも水が枯れたことがあらしまへんね。淵には秋から春まで鴨が飛んで来まんね。それからここに堂か屋敷がありましたな。土地の人は、「現在長谷寺の重要文化財になっている千体仏像は、もと、この御堂にあってね。ある年、山が荒れて困るので、相談して長谷寺不動堂に移したんやと言います。

長谷寺は、もとお堂がここにあったんと違うかと言う人もあるそうです。

それからこの迹驚淵は、奈良の猿沢池まで連なっているといひます。

そんな話は他にもあります。

心見の池 (笠)

荒神社に詣でる途中に試みの池とも言いますが、この池の底が、奈良の猿沢池まで通じていて、この池へはまった猿沢の池まで、落ちると言うことですね。

天の岩屋 (龍谷)

龍谷に天の岩屋というところがあります。

昔、北の慈恩寺で世話してきたんですが、今も雨が降らなんだら、祈願のために詣りますね。その岩屋の中に清水が、ちよろちよろ流れてまして、そこへ白木綿を流すと、奈良の猿沢池まで流れてゆくと言われています。

(大和の伝説、郷土による)

衣通姫

(忍坂)

忍坂の玉津島神社のかたわらに一衣通姫の産湯の井戸」があり、今も里人は女子を産んだ時には、この水をくんで産湯を使わせる。

衣通姫の生まれたところというので「生谷」という。(大和の伝説)

その衣通姫については、古事記と日本書紀では異なっています。

允恭天皇の皇后忍坂大中姫の弟姫と日本書紀にはなっていて、古事記にはその忍坂大中姫命の皇女となって、安康天皇の妹、雄略天皇の姉になっています。

いずれにしても、容姿秀れて比べる人がいないくらいで、その色艶のあるきれいな体は、衣を通して光り輝いていたということから世の人は衣通姫と申し上げたそうです。

弟姫衣通姫

(日本書紀)

允恭帝七年十二月、新宮造成の宴の時に、帝自ら琴をおひきになり、皇后は、舞を舞われました。その時、皇后は、自分には美しい妹のいることを、ちょっと口をすべらせてしまわれたのでした。帝はまだ見ぬ衣通姫の色香にあこがれていました。

誇り高い皇后の性格をよく知られている弟姫衣通姫は、姉君の太后をはばかり帝のお召しに答えられなかったのですが、中臣烏賊津使主の計略に計られてうまく連れ出されてしまわれたのでした。

帝は大いに喜ばれるのですが、皇后の気持ちは平らかではありません。

それで、姫を宮中に近づけず、藤原宮にお住ませになりました。

折しも、帝が初めて衣通姫を訪ねようとなさった日は、のちの雄略天皇のお生まれになる日に当たりました。

そこで皇后は、

「私は、幼少のころから妃としてお近くにおります。お産が今か今かと思っている時、女の業とは言え生死の境をさまよっている今、それを捨ててなぜ今夜、そんなに藤原にお行きになりたいのですか。いっそのこと産屋に火を付けて、死んでしまいたいです。」と、おっしゃって、帝もまだ見ぬ衣通姫への思いを押さえられたということもありません。

帝は、八年二月藤原に行かれました。

衣通姫からも消息を届けられ、帝を恋しのんでいる様子が伝えられました。

我が天子が来べき夕なり

ささかねの蜘蛛の行ひは夕著しも

帝も大へん喜ばれて

ささらがた錦の紐を解き放けて

数は寝ずに唯一夜のみ

翌朝、帝は井戸のほとりの桜の花を見られて

花ぐはし 桜の愛で 同愛では

早くは愛です 我が愛づる子ら

花のこまかく美しい桜の見事さ、同じ愛するならもつと早く愛すべきだったのに惜しいことをした。わが愛する衣通姫もそうだと、姉君には似ぬもの柔らかな立ちふるまい、その色香のなめらかさに、ただ衣通姫を称え、満足されたのです。

しかし、皇后の嫉妬もひととおりではなく、衣通姫の苦しみも耐えられぬものでした。

そこで衣通姫は、

「私は帝に王宮の近くにおり、夜と言わず、昼といわず、あいまみえ、帝の威厳あるご様子を見せていただくのを幸せと思っております。しかし、皇后は、私の姉、私のためにこれ以上姉が帝をお恨み申すことになってはと思ひます。また、私もそれが苦しゅうございます。いっそ王居から離れて、皇后の嫉みの心を少しでもやわらげとうございます。」と奏上されました。

その後、衣通姫を河内の茅渚にお住まわせになったのですが、その後しばしば、和泉の日根野に狩りに出られたことが続いたのです。

御狩りも衣通姫に合う口実だったのは言うまでもありません。

皇后も、

「私は、髪の毛の先ほど弟姫に嫉妬をしているのではありません。ですけれど、陛下はしばしば茅渚に御幸なさいます。

これは政事をないがしろにすることになりました。民百姓を苦しませることにになりませぬか、せめて車で出られる回数だけでも、お減らしになられてはいかかですか。」とおっしゃるので、しかたなく回数を減らされるのでした。

久々に合う衣通姫は以前にも増して、心憎いばかりに思われました。

その花やいだ若さとこぼれるような美しさ、なやかな白い肌には、内から光り輝くような曙の色がさし、月の光・日の光を移す瞳、漆黒の闇を磨き上げたような長い髪、いずれも天折を感じさせるような美しさをたたえていた。

とこしへに君も会へやもいさな取り

海の浜藻の寄る時々を

「すっかり安心して、いつも変わらなずにあなたにお逢いできるのではありません。海の浜藻のように稀にしかお逢いできないんですもの」と歌われ、衣通姫の瞳からは真珠のような涙が頬を伝って落ちるのでした。

茅淳で過ごしたきぬぎぬほど、鶏の声を恨めしく思うことがなかったくらいでした。再び抱き寄せる衣通姫の軽ろやかな寝息となめらかな肌に、このまま姫が消え入るのではないかという怖れさえだかれるのでした。

帝が自らの年令を意識されるのもそんな時でした。

帝は、大伴室屋連に、

「朕は、最近、美麗な娘を妻とすることができた。皇后の妹なのだが、心はいつもとは異なって、締めつけられるような切ないものをたえず感ずるのだ。」と、ついにらされたとか。

軽太子と衣通姫

(古事記)

反正天皇のあとを継がれ、允恭天皇が位につかれ、この天皇は意富本杼王の妹、忍坂の大中津姫を皇后として、お生みになった御子は、木梨軽太子、長田大郎女、境の黒日子の王、穴穂の命(安康天皇)、軽太郎女(またの名を衣通郎女、衣通姫とい

うのは、その身の光、衣より通り出るからである。）、八釣の白日子王、大長谷命（雄略天皇）、橘大郎女、酒晃郎女であるとしている。

木梨軽太子と軽大郎女、（またの名を衣通姫といった）二人の同母兄弟のことについてには紀に詳しい。

允恭天皇二十三年三月七日、木梨軽皇子を皇太子とされました。その容姿佳麗で、見る人を深く感動させられました。同母妹軽大郎女（衣通姫）も容姿美麗で、色香に妙なるものがあつたといひます。

太子は妹の衣通姫にあこがれ、妻としたいと常に考えてられたのですが、不倫の罪になるので、ただ耐えておられたのでした。

しかし、妹への恋慕の心は、つるばかりでそのまま死んでしまうのではないかと思われるほどでした。

そのまま死んでしまうのであれば、どうせ同じこと、たとえそれが罪となるにしても、どうしてこれ以上耐えることができようと、ひそかに衣通姫に知らせたところ、姫も同じ心であり、気を強くされ、二人が通じ合うようになり、少しは息苦しい恋情も晴れたとか。

しかし、表沙汰になれば、禁じられた恋、二人はひそやかに逢瀬を楽しまれるのであった。

あしひきの山田を作り山高み下樋を走せ

下泣きに我が泣く妻

片泣きに我が泣く妻

今夜こそ安く膚触れ

山田に引く樋のようにひっそりと忍び泣きに私を恋い泣く妻よ、ひとり泣きに私を恋い泣く妻よ、今夜こそこだわりなく、わが肌に触れよ、と歌われ、また太子の心の中には、

笹葉に打つや霞のたしだしに

率寝てむ後は人は離ゆとも

愛しとさ寝てば 刈蘆の乱れば乱れ

さ寝し さ寝てば。

女を可愛いと思つて率寝さえしたのだ、後で別れるようなことになろうともままよ、という気持にもなられたのでした。

隠しおおせることができず、父の帝は措置に苦しまれ、太子を罰することもできず、衣通姫を伊予に流されるのでした。(紀)

この事件が発覚し、允恭帝なきあと人心は太子を排して第二皇子の穴穂皇子(安康天皇)に味方することになったのでした。

しかし、古事記では、その事件は、帝の死後になって、太子が伊予に流されることになっていきます。皇位の継承の問題がからんでいます。

太子を排するには、それ相応の理由がなければなりません。

軽太子の不倫の恋をあげて、百官、民は穴穂皇子に組します。

太子は大前小前の宿弥の大臣宅に逃げ込み、兵を備えるのですが、もはや敵すべくにあらずと悟った大臣は、

「大君の子よ、兄王に兵を向けるようなことをなさいますな。必ず人が笑うことになりましょう。私が説得して捕らえ奉りましょう。」ということになって、太子が伊予の湯に流されることになるのです。(記)

その時の物語歌として次のようなものがあります。

軽太子が伊予に流されようとした時の歌、

天飛ぶ鳥も使ぞ

鶴が音の聞こえむ時は我が名問はさね

空を飛ぶ鳥は使いだ、鶴の鳴き声が聞こえた時は、私の名を告げなさい。あなたの言葉を私の所へ運んでくれるでしょうと歌われ、また、

大君を島に放うらば 船余りい帰り来むぞ

我が疊ゆめ

言をこそ疊みと言はめ 我が妻はゆめ

伊予に追放されたとして必ず帰って来る。

留守中、私の敷物を忌み謹んで、けがれのないようにしてくれ。言葉では疊みとは言っているが、本当は私の親しく愛した妻よ。

清らかな身であってくれ。と軽太子は、衣通姫にいま別れゆく切々たる胸の悲しみを述べられるのでした。

衣通姫は答えられて歌われました。

夏草の阿比泥の蠣貝に

足踏ますな あかしてとほれ

夏草の阿比泥の浜のかきの貝殻は鋭利で手足を深く切ることがあります。夜の明け
るのを待って行きなさいよ。

つかの間のはかない恋に、相手が実兄とは言え恋慕の情にへだてはありません。

その後、衣通姫は恋情に耐えかねて、伊予の国に軽太子を追って行かれたのでした。
その時の歌に、「太子が伊予に行かれて、ずいぶん永い年月が経ってしまいました。
わたしの方から迎えにまいります。じっと待ってなどおられません。」というのがあ
ります。

伊予で軽皇子が衣通姫をお待ちになっ
ていて、出合われ懐かしがられて歌われた歌
に

隠国の泊瀬の山の大峰には幡帳り立て

さ小峰には幡帳り立て

大峰にし仲定める思ひ妻あはれ

槻弓の伏る伏りも梓弓立てり立てりも

後も取り見る 思ひ妻あはれ

大きな山のように頼もしく二人の仲を思い定めている妻、弓が伏していたり、立っ

ていたりするのを、のちで手に取るように、伏していても立っていても可愛い姿の思
い妻を、後には纏き寝よう、その思い妻がいとおいしい、というのがあります。

また歌われて、

隠国の泊瀬の河の上っ瀬に斎杵を打ち

下っ瀬に真杵を打ち

斎杵には鏡を掛け、真杵には真玉を掛け

真玉なす吾が思ふ妹、鏡なす吾が思ふ妻

有りと言はばこそよ

家にも行かめ 国をは偲はめ

隠国の泊瀬の斎杵に掛けた玉のように鏡のように大切にいとしく思う妻、その妻が
いるならば、故郷に行きましょう。恋い偲びましょう。もう故郷すら何の愛着もない。
現実になたしの愛する妻が、これここにいてではないか。

二人は強く抱きしめ合うのでした。

二人は、恋の日々を過ごすのですが、この世の中で許されぬ恋だけに甘美に過ぎ、
やがて二人の恋が許されるであろう、再び引き離されることのない夜見の国へと旅立っ

たのでした。哀れにも、あまりに美し過ぎた二人の悲劇と言えましょう。

その衣通姫の誕生地をここ押坂とする。

(日本古典文学大系による)

鶴の塔

(粟原)

昔、半坂道に、どの辺にあるのか土地の人に聞いて見るとわからへんけど、あそこ
に大きな松の木があったそうですな。

そら今は枯れておまへんけど、そこに一羽の鶴が傷ついて舞ひ下りたそうですわ。
里人は、これを憐れんで介抱して放してやったそうです。

のちに、その鶴が恩を報いるために、十三重の石塔を寺に築いたそうですわ。

建立年代も建立趣意も何も刻まれてなくて、ただ足元に梵字がボンとあるだけです
さかいに、そんな話が生まれて来たんやと思いまんね。それに里人の心の豊かな美し
さだすやろか。

(米田一郎氏による)

※

※

※

昔、六本の浦西と言う家へ病氣をした一羽の鶴が舞い下りて来たんやそうだとす。

このうちの人等が、えらい親切に世話しやはって、病氣を治してやらはって放してやらはったそうだとす。

鶴はえろ喜んで飛んで行ったそうだとす、その後、助けてもろたあの鶴が、この家の上を何回か飛んでまわって、くわえて来た曼陀羅を落として飛んで行ってしもたそうだとす。

こんな結構なものを落として行くぐらいやからを言うて、浦西家では、その鶴の供養をする言うて一三重の塔を建てやはったそうだとすわ、せやさかいにこの塔を鶴の塔と呼ぶんやそうだとす。

(桜井町史続参考)

松尾の長者屋敷

(粟原)

昔、粟原に松尾という貧しい農家があったんやそうと、家の人は氣が良うて、近所の人にも好かれてやはったんです。ところが、そのの嫁が懐妊して、間もなく無事に出産しやはったことは、しやはってんけど、それが人の子やのうて、袋をかむった一

匹の蛇やったんやそうや。

親族の人も近所の人も、「そんなもの殺してしまい、捨ててしまい。」とやかましく言わはんねけど、嫁さんは、「蛇であっても我が子は我が子や、神様から授かったんや判らへんし。」言うて、名を「みいさん」とつけて育てやはたんや。

二、三年経つと大きく育ったんで、裏庭へ放してやらはってんと、そんだったら、すぐ岩穴見付けて入ってしもうてんと。

その後、変わったごつと（ごちそう）があるたびに、「みいさん」言うて、食べ物やらはったんや。

何年かのちに、大和はえらい日焼けで、種朶も取れへんやろと思うような日焼けやつてんと。村の人は、八方手をつくして雨請いをしやはったんやけど、一滴も雨が降らんかったんやそうや。

その時、みいさんのお母はんが、「ふとあの子に頼んでみよ。」という気になって、裏へ行って、「三日のうちに雨降らしてくれへんか」と頼んだんやけど、「みいさん」はだまっとうなずいたんで、村の庄屋にこのことを言わはったんやそうや。

母親は毎日頼みに行つて「今日こそ確かに頼むで、庄屋はんにも言うたるし、雨降

らしてや」と三日目には強う念を入れて頼まはったんや。

へたら、あら不思議や、一瞬に空が曇って来て母親が母屋に帰れんほどの大雨になつてんと。

村はもちろん、大和の国中お喜び、おかげで、その年は、大豊作になつたんやそうや。

あとで、このことが「みいさん」のおかげやと判り、村の人はほこらを作つて「みいさん」を祭らはつてんと。

この時から、松尾家は、ええことばかり続いて、とうとう百万長者にならはったんや。そして永う栄えたんやそうや。今も長者屋敷の跡がありますね、粟原に。

(桜井町史続による)

聖林寺の子安地蔵尊

(下)

昔、この寺に文春法師という偉い和尚さんがやはつて、全国を行脚して、修行しやはつたんやそうや。

前から「地藏尊を作りたい、作りたい。」と思たはったんやけど、この付近に石材があんねやけど、ええ石工がおらんで困ってやはったんやが、ある晩、夢見やはって、「但馬の国にええ石工がおる」と教えてもらはったんや。

さっそく明くる朝、但馬の国へ和尚さんが出発しやはったんや。

夕方、奈良の町へ入ろうとするところで、向こうから三人連れの男さんが来るのに出合はったんや。

「もしもし、あんさんたちはどこへ行はるのや。」と尋ねると、

「はい、わしやは但馬の国の石工やけど、ええ石がのうて地藏さんも彫れへんで困ってます。夢で、大和に地藏さんを彫るのにええ石があると知らされて、喜んで来ましてん、いま行くところです。」と男達は言うやありまへんか。

「ほう、わしも夢で、但馬の国にりっぱな石工がいると知らされたんです。」と和尚さんが言うて喜ばはって、これも仏の引き合わせや言うて、桜井へ連れて来やはってんと。次の日から石工は聖林寺の地藏尊を彫るのにのみを振るわはったんや。

それでできたんが、あの地藏さんやねと。

石は聖林寺の後ろの山にあった山石で、石の大鳥居も同じ石で作らばったんやそや。
や。

(風俗誌 桜井町史による)

楠堀山のふっくり

(今井谷)

ふっくりというのは蘭の種類の一つで、今井谷の楠堀山に生えてますねや。

ここではな、昔から、根をつぶして、関伽井の水で練るとな、切り落とした首でもつながって、生き続けられるという話がありますねや。そんな位やさかいに、楠堀山のふっくりを水で練ったら、どんな傷でも治ると言います。しかもこの種類の蘭は、ほかの山にもありますねやが、効験はこのしかないと言ふことです。

さきに言うた関伽井も今はつぶれてしまってますけど、昔は、じょうたり水が湧いて、夏時、百日の旱天にも水が絶えなかったんですけどな。

(桜井町史統による)

立音羽と黒崎の印相

(音羽・黒崎)

むかし、音羽に千坊もお堂のある寺があったんやそうや。その時、札所の番定めがあったんですが、その時、黒崎の隣の出雲の観音さんが、この番定めを邪魔しやはったんやそうや。

それで、音羽は黒崎に火の印相を結んだんや。

黒崎は音羽に水の印相を結んだんやと。

そやから、黒崎石は、黒うて焼けただけたようになつたんね。音羽は、水のために流されたんや。今でも音羽流れというて伝えられてます。

(桜井町史続)

六万ヶ谷

(八井内)

八井内のうしろの山を六万ヶ谷と言いますねやが、永正十二年(一五一五)の頃、多楽院と言う地藏堂があって、勝軍地藏を祭ってたらしいですが、今はその跡だけ残っ

てます。

享祿五年七月二十八日（一五三四）多武峯が攻められた時は、その地蔵尊の威力を頼みにしたそうです。

天正の兵乱、松永久秀が多武峯を攻めた時には、杉松の立木が六万もの軍勢に見えたというので、こんな名前がついてますね。

（風俗誌による）

天狗杉

（初瀬）

長谷の観音さんの一の回廊を登りきったとこの右側に大きな杉がありますやろ。

あれを天狗杉と言いまんね。

昔、美岳大僧正というえらい坊さんがやはってね。この人は伊賀上野の人でな、小僧の時から長谷寺で修行して勉強しやはってん。

里の寺は貧乏やさかいに、毎晩回廊の釣燈籠に火つけてまわって、残りの油をもろて、自分の部屋の行燈に火つけて勉強しやはったんやそうや。

その頃は回廊の右も左も大きな杉の木が生えてて、天狗さんがおって、いたずらするんやと。

釣燈籠の火消したり、油の皿ひっくり返したりして。

美岳さんは、まだ小坊主さんの時やってんけど。

「天狗や言うても、お前もこの長谷の寺で厄介なってるのと違うか。」

そやのに、観音さんに上げる燈籠にいたずらしたり、ぼんさんにまで迷惑かけんのはけしからん。おれはこれから修行して、偉うなって、この寺の一番偉い人になる。

そして、お前らの住んでる杉の木、一本残らずみな切ったるさかいに、そねん思とけよ。」

と言うて、今までよりもっと勉強しやあったんや。

それから五十年、六十六才で能化にならあったんや。

美岳大僧正は、豊山の各伽藍を建てなおしたり修理するのに、杉の大木を切らはってんと。

木樵りが、最後の一本を切ろうとした時に、

「まあ、この杉だけは、切らんと置いといたってくれ、わしは天狗のいたずらで奮して勉強したんや。せやから、天狗はわしの恩人や。この一本ぐらい天狗の安住の地を残しといてやってもええやろ。」と言うて、残すように言わはったんやそうや。それがその木やそうや。

（大和の伝説による）

木並木鐘

（初瀬）

長谷寺の長い回廊を上りきったとこに鐘があつてな、未来鐘といひますねわ。なんでも、昔、山城の木津の里に一人の貧しい野慈と言う人がやはってんと。家は貧しかったんやけど、信心深うて、月参りを欠かさはらへんかったんや。ある時、この野慈という人が、「ここの寺の鐘つき堂は小さいな」と言うて、「わたしの願いがかなえられたら、鐘を一つ奉納する。」と言わはったそうやけど、聞いている人は、「なんや、未来のことか。」と言うて、「未来男」とあだ名をつけて馬鹿にしたんやと。

その後、観音さんの御利益もあり、奮発もしやはって、近江の国司代になって、名を栗田助貞と改めはって、つり鐘を奉納しやはってん、そんでん、この鐘を未来鐘というんやね。

（大和の伝説による）

曾我地蔵

（初瀬）

長谷寺の本堂の中に曾我地蔵という地蔵さんが祭られてますねけど。

文禄（一五九二）の昔、奥州田村にある多聞院の鏡線という人が、長谷寺の専誉上人について勉強修行を習はったんやけど、その人が、里帰りして、再び長谷寺へもどろとして、箱根の山中の権限さんの近くで、狩衣を着た一人の老人に会わはったんや。

その人が、

「わしは曾我十郎祐成というもんで、地蔵の呵責を受けているもんや。第五郎時致は仏の力で生まれ返って、長谷寺の専誉上人になってんのや。それで、お前が寺へ帰っ

たら、專誉に地藏菩薩を彫ってわしを成仏さしてくるようにと頼んでくれ。」と言わはったんや。

「せやけど、上人がどうして五郎やと判るんや。」と鏡線が尋ねやはると、

「上人の右脇下に牡丹の形の赤いあざがある。また腕力があって、とくに左手が強い。」と答えて、すうっと姿が見えんようになってんと。

長谷寺へ帰って鏡線が專誉上人に言うのと、

「右脇下に確かにあざはある。力はそうすぐれているとは思わへんけど、何を持ってても、そう重たいとは感じやへん。」と言うて、ためしに左の手で庭石を持ち上げやはると軽々と上がったんやと。

それでは、前世の兄十郎の菩提のためにと言うて、この地藏さんを彫って、祀らはったんやそうや。

(大和の伝説による)

塗りつぶしの絵馬

(初瀬)

百年以上も前のことやねけど、長谷寺へ、弁慶と牛若丸との五条の橋の絵をかいた絵馬を奉納しやはった人があつたんやそうや。

それ以来、每晚每晚、長谷寺では剣げきの音が聞こえ続けてんと。不思議に思つて、寺の僧正さんが、ある晩、ひそかに音のする方へ行つて見るとその絵馬そっくりの姿の弁慶と牛若丸が出て争つていたんやと。それで朝になつてから、絵馬を墨で塗りつぶさはつてんと。すると、その晩から剣げきの音が聞こえんようになつたんやそうや、やがて一年二年たつと墨もはげてくるわな。そうするとまた夜中に剣げきの音が聞こえてくるんやそうや。

僧正は困りはててな、絵馬を取りはずしもでけへんしというて、毎年一回絵馬に墨をぬることに決めやはつてんと。

(大和の伝説より)

龍野

(和田)

和田の一部に龍野という垣内がありますねやが、昔、霧の深い日に和田の神社の方で、大きな音がしたんやそうです。

村人が驚いて出てみると、霧の中を龍がほうてあがってゆくのが見えたんやそうです。

龍は、今の龍野の堂山あたりへ下りて来たんでっしゃろなア。それから、龍野と言いますねや。ここには家が数軒あって、神社も寺もあつたんやそうです。

(大和の伝説)

天狗

(白木)

白木の金が平山に、ここは鐘が平山とも書くんですけど、聖武天皇の時分に白木寺という観音堂があつて、貝が平山の鬼門よけに建てられたんやそうや。そのつり鐘二つは、東大寺のより大きかつたんやそうやけど、えろ雨の降り続いた年に、山崩れ

があつて、初瀬川から堺の浦まで流れていってしもうたんやそうや。

その金が平山の中腹になあ、天狗の松というのがあつたんや、せやけど雷落ちて枯れて、今はのうなつてるんや。ただ株だけあつてメ繩をはつてるんやけど。

むかし、村のある人が、金が平山で炭焼きしてると、えらい地響きがして大きな声を聞いたんやそうや。何を言うてんのか判らなかつたそうやけど、命からがら逃げて帰らはつたんやそうや。

翌朝は何もないようやつたんで、また炭を焼きに登らはつたんやそうや。

炭釜にドダ木をつめ、きっちりつめんねけどな、一ぺん火つけたら二三日泊まって燃やし続けんとええ炭が焼かれへんのや。それで釜の横に小屋をかいて（作つて）寝やはんのや。

その晩、炭小屋にいるとな、茶碗のまる位あるキセロの雁口が、小屋のむしろの戸の横からにゅつと入つて来たんや。

そして外から大きな声がしてなあ、「ここへ煙草をいっばい詰めてくれ。」と言はんや。

家内中の煙草を雁口に詰めてやつたんやそうや。へたら「おおきにお礼するぞ。」

と云うてどこかへ行つたんやそうや。

家内中何んのことかわからへんけど、怖うて、怖うて震えてやはってんと。そして一時間ほどすると外で大きな音がしたんやそうや。怖うて見に行くものもおらへんし、しょんべんも辛抱して、家内中くらいついて寝てやはってんと。

朝起きて、よんべの音なにやってんやると、見に行かはったら、炭釜の口のとこへ、ひと釜分くらいのドタ木（炭木）が、置いてあつたんやそうや。そんでん、あれは金が平山の天狗やってんなということになつたんや。

それがかどうかわからへんけど、昔から金が平山へは女は登つたらあかんと云うことになつたるんやそうや。

また白木の金が平山へのぼる途中に神田というところがあつてな、三尺ぐらいの四角い石が道ばたにあるんや。その石にはのみのあとも見えるんやけど、これはな、天の邪鬼が、天までとどく塔を作ろと思つて、石を積み上げたんやけど、もう一つというところで崩れてしもてんと。それがその石やねと。

そやさかいに、この石を天の邪鬼石（じゃくいし）と言うんや。

（郷土・大和の伝説による）

泊瀬斎宮

(小夫)

日本書紀の天武紀の「夏四月十四日に大津皇子の姉君大来皇女を天照太神宮にたてまつろうとして、泊瀬斎宮にはべらせた。ここで先に身を潔めて、次第に神に近づく所である。」としてますねけど、その場所が問題ですわなア。そこで思いますねけどな、西大寺田園目録に「ここに小夫郷があり、笠、竜野、和田、滝倉、小夫の五村を言う。」として日本地理志科には「古へは笠縫邑と言へり。」となってますね。ここらは昔は多氏の居住区で祭祀を司る嵩日部の住んでいたことも考えられます。それに小夫に天神社というのがありましてな、そこを斎宮山と呼んでますねや。

笠、笠山というのも、そこから出た名前やという人もおますねが、とにかく、上之郷と伊勢神宮との関係を示すような伝承を挙げてみますと、たとえば、化粧川、笛吹山などがありますねやが、どんなことですよなア。

化粧川

(修理枝)

小夫の天満天神社の西八町のところに化粧川というのがありましてな、大来皇女が

天照皇太神宮に、伊勢の斎王として、未婚の皇女か女王の中から卜定して、伊勢神宮に奉仕させることになり、天武二年四月から翌三年十月までの間、潔斎するために、泊瀬斎宮におられたようです。

大来皇女が、身を潔めるのに、この化粧川で禊をしたという旧跡なんです。

気波比壺、一名化粧壺というて、化粧川の中央に岩があり、岩の中に凹みがあって、壺のようになってますねや。

直径五尺余りあって、深さは判らしまへんけど、これが禊ぎをされた時の壺やということです。何かこの土地と関係がありますねやろか。またそれが、大来皇女の化粧台やとも言われていますね。

笛吹山

(小夫)

また伊勢と関係のあるもので、笛吹山というのが小夫にありますねやが、この山の前に笛吹淵といまして、その谷川に架かったる橋を笛吹神橋というのがあって、この橋を人が渡ると、えらい腹痛が起るといわれていますね。

昔、笛吹大明神(天細女命)が、天香久山の竹を取って来て、笛を作って吹き鳴ら

して、天照大神へ神楽を舞われたということです。伝説歌にこんなんがありますねや。
天照大神の隠れる戸をあけて

日の出にかへす笛吹の神

昔、この近くで、夕方になると笛の吹く音が聞こえて、なかなかすごい所やったんです。

大来皇女は斎王となって伊勢へ行くことになったのは、東国制圧する拠点に、皇族の誰かを送っておくことも利点となるし、天皇即位のはじめに送られるということとは、壬申の乱で神宮の協力を得たのでその報賽の意味もあったかもわからしまへんなア。
ところで斎宮の位置は、大和志によりますと「在初瀬気波比坂下」とあって化粧坂の所やという説もあります。

与喜浦より天満宮鳥居に通じる道を上化粧坂、伊勢辻に通じる方を下化粧坂と呼んでいます。

ここは泊瀬斎宮跡だと言い伝えられ、伊勢に詣でる女御の化粧したところとも、倭姫命が化粧されたところとも伝えられています。

(日本書紀、大和の伝説、郷土を参考にする)

寢地蔵

(小夫)

小夫から三谷を通じて都介野へ行く途中に大きな石があつて仏さんが刻つてまんねや。

そこを寢地藏、土地の人は「ネンドはん」と呼んでますね。

花崗岩でできた磨崖仏で、地藏さんは四尺四寸五分の大きさに丸い光背と錫宝珠を持ってやはって、自然石に線刻りした蓮座の上に立ってやはるんです。像の左右に、願主蘭生庄の住人祐禪浄覚房、延慶二年六月二十四日これを造るとあるんです。

阿弥陀立像は三尺三寸五分あるんです。もう一つ阿弥陀坐像があつて、定印二重の光背を持つ一尺三寸のもので、同じ時に作らばったんやと思われますけど、今は皆な別々になつてますねや。岩がわれたんですやろか。ここの地藏さんらは、字上の仏からここまで移さばったんやけど、地藏立像だけがあんまり石が大きて立たなかつたんやそうです。

代わりに一尺三寸の方を彫らばったんやという話もあるんですが、今ある地藏さんを起こすと願ひごとが聞いてもらえと言わはるんです。今は下の仏という字に置か

れているんですが、昔、大男が、この地藏さんを起こそとしたんやけど、よう起こさなんだというところで、その大男の足跡が、田一枚ほどの大ききさで今でも残ってるんやと。

石に鎖のあとがついてるとも言われてるんや。

(郷土より)

昔長九郎長者

(笠間)

与喜浦から永井坂を登り、笠間へ行く途中にかなり広い荒れ地があつて、長者屋敷と言いますねや。

昔ここに一人の貧乏な若者が住んでたんです。正直でよう働き、神仏への信仰も厚かつたそうです。

ある時、長谷の観音堂で七昼夜断食の業のため参籠しやはつたそうです。

ちようど結願の日、飢えを忍びながら永井の坂までたどりついたんやそうです。

ふらふらしてやはつたんやけど、ふと前を見ると、芋のつるがあつてんと。こら掘っ

たら芋があるに違いないゆうて、われを忘れて掘らはったらなんと黄金がいっぱい詰まった壺が出て来たんやと。それでこの若者は急に金持ちになって、大きな家を建てやはって、養丸長者と言うたんやそうや。

長者屋敷あとの近くに、今はくぬぎ林になったるけど、長者の栗畑という所もあるんや。それに北側の谷に鯛の骨という地名があるんやが、せいたくしたんやろな。二代で滅んでもうたと言うこっちゃ。金持ち三代、貧乏永代ということばもあるけど、三代も続かへんかってんな。

(郷土、大和の伝説による)

神々の祭礼

(三輪)

崇神天皇の御代に疫病がはやって、たくさんの人が死にました。

天皇は毎日毎日心配なさっていましたが、ある夜、大物主大神が夢に現れて、

「これは私のしわざなのだ。意富多多泥古(吾兒、大田田根子一紀)に、私を祭つて祈願させよ。そうすれば、国が平和になるであろう。」とおっしゃった。

さっそく早馬を四方に走らせた結果、意富多多泥古という人が、河内の美努（みの）村におられるを見付け出しました。

帝が「汝は誰れの子ぞ。」と問われますと、

「父は大物主大神、母は活玉依媛（すえつみみ）の娘を大神がめとって生んだ子供です。名は意富多多泥古といひます。」と答えました。

帝は大變喜ばれて、「これで世の中は平和になり、人民は榮えるだろう。」とおっしゃって、意富多多泥古命を神主として、三輪山の意富美和の大神を祭られました。

また伊迦賀色許男の命に仰せて、天の八十平盃（いっぺ・杯）を作り、天神地神の社を定めて、宇陀の墨坂神社には赤色の楯矛を祭り、大坂の神には墨色の楯矛を祭り、坂の尾の神、河の瀬の神にのこらず幣帛（みてくら）を捧げられました。

それによって、疫病はやみ、国が平和になりました。

（古事記中巻・崇神紀）

一二松輪神婚説話

(三輪)

活玉依媛(いくたまよりひめ)という方が、三輪の里にお住まいでした。その顔も姿もさっぱりとして、それはお美しい娘だったそうです。

その娘のところに姿形装いが、たぐいまれに見るほどりりしい立ちふるまいの男が、ある夜中に突然やって来ました。

おたがいに相手の美しさに見とれて、恋をすることになりました。二人は親に知られずに時を過ごすことが多くなりました。

まだあまり月日も経たない間に媛は妊娠してしまいました。

娘の父母は、娘の妊娠しているのを知り、不思議に思ってたずねました。

「汝は一人で妊娠したのか、夫なくしてどうして妊娠したのか。」

「美しい男の人が、その姓名は知らないのですが、毎日やって来て、共にいる間に懐妊してしまいました。」と娘は答えました。

それではということになって、その父母がその男の名前を知ろうとして、娘に教えました。

「こんど来たたら、悪靈邪鬼を払うといわれる赤土（はに）を床の前に撒き散らし、針に麻糸を通して、その男の衣の裾に止めておきなさい。」

その夜、さっそく教えられたように衣の裾に糸をとめました。

朝、媛が目を覚ますと、もう男の人はおりませんでした。

ただ、麻糸をひいて、入口の戸の鍵穴から抜けて外に出ています。

部屋には大束にしてあった麻糸が三勾（まき）しか残っていませんでした。

これによって、いつも通って来る夫は、鍵穴から出て行ったことを知りました。

とにかく、その糸に従って尋ねて行きますと三輪山の神社に続いていました。

それで男は三輪の神の子だと判りました。

もちろん、その男の人は二度と活玉依媛のもとには訪れてきませんでした。

三輪はその麻糸の三勾（みまき）残っていたので、この地を美和、と名付けましたとさ。

この時代、妻訪婚で、妻訪に当たっては、一定期間、男は自分の素性をかくし、顔面を見られることを忌む風習があったらしいです。

新婚数日後、新婦の里で新郎を饗応する儀式を「所顕し」と呼んだそうです。

活玉依媛の父母は急ぎすぎたので、娘の夫に逃げられてしまうことになったのかも知れません。

(崇神記による)

二 三輪山の猿

(三輪)

国が乱れると天変地変が起こるとよく言います。

皇極天皇の御代もそんなことが言えるでしょうか。

雲がなく雨が降ったり、白雀の子が捕らえられたり、十二月なのに、春のように暖かくて雷が鳴ったり、二月に桃の花が咲いたかと思うと、直径一寸もあるあられが降ったり、数えたらきりがありません。

皇極三年六月一日にも、大伴馬飼連が、茎の長さ八尺もある百合の花を天皇に献上いたしました。それも本が別で、末が連なっているという変わったものでした。

その六月三日のことです。

志紀上郡の話として、「ある人が三輪山に登ったところ、木の枝で猿が昼寝をして

いたそうです。それで、物音を立てずに、いたずら気を出して猿の腕を引きちぎってしまいました。

不思議なことに血も出ないし、気付いたようすもなく、猿は眠り続けておりました。そのまま、寝言のようにその猿が、

向つ瀬に立てる夫らが

矛（にこ）手こそ 我が手を取らめ

誰が裂手 裂手そもや

我が手取らすもや

と言いました。

その人は、気持ちが悪くなって、その猿の腕を放りなげて逃げ帰りました。

これは、後年聖徳太子の皇子山背大兄皇子一族が、蘇我入鹿のために生駒の山で包囲され、のち斑鳩寺で殺される悲劇の前兆なりと伝えられています。

その歌謡は本当は、歌垣の歌で、内容はもっと色っぽい女性の歌なのですが。

（皇極紀による）

二 三輪上人慶円

(三輪)

土御門院の時代のことです。

宇陀の室生山で修行され、学問、有徳の名僧として知られている人がおりました。ある時、薄衣を着た女の人に路で出会いました。そうするとその女性が言うのに、「八幡大菩薩より伝授された印明（教え）を、私に伝授されたい」と。

八幡大菩薩から極秘の教えを受けたなどということは、他人の知ることではない。

何か、ただ者ではないと思つて、その女の言う通り、極秘の印明を伝授されました。「七仏の出世に値いする貴い教えだ。少しも違つてはおらぬ」と言つて、「いったい、どこから来られたのか」と尋ねますと、「室生の方におりました。」と言つて、はたはたと鳴きながら、大きな龍の姿になって、空に登つて行きました。

慶園上人によつて、濟度されて、善女となり成仏することが、できたのでしよう。その時に報恩のためにと、仏舎利一個を爪先に持つて上人に捧げたということ、今も室生寺善女龍王爪刺の池が、そのゆかりの池です。

後、慶円は三輪山の大三輪寺に住むようになり、三輪清浄一相平等の地だとして、

平等寺と寺名を改め、衰頹した伽藍を修理し、境内に藪を植え、寺領を回復した。

上人がなくなつた時、死体になんとも言えぬいい香りが漂い、一条の光明が、平等寺より川向こうの極楽寺に走つた。

長谷川の堤には、阿弥陀三尊の来迎のお姿が見えて、お墓の松の木には美しい紫雲が、かかったということです。

今ある極楽寺の十三重塔は、上人の遺骸安眠の所ということです。

(大神神社資料による)

二二松欄立里子

(三輪)

若い時分から興福寺で修行を積まれた行賀上人が、三輪山近くに住んでおられたそうです。そして、修行に精進されていたそうで。

ところがですわ。いつも若者が、上人のところへ花を持って来て、住所も名前も言わずに帰るんです。

いっぺん名前を聞きたいと思つてるところへ、また花を持って来たんですわ。

それで上人は、今夜はここで泊っていけ、ゆっくり話そやないかと言いますと、そんなら、そうしますと言うて庵へ上がって来るんです。それでおすまいは、お名前は、と聞きますと、その青年は、「それより上人様の片耳がないように思うのですが、どうされました。」ときくんです。

「それはたいしたことないのです。ある時にお前さんと瓜二つの青年がやって来て、私はいま、悪い瘡（くさ）にかかっているのです。」

上人の耳が、ええまじないになるので借してくれと言うので、あんまり可哀想なんで、右手で片耳を切って借してやったんです。」

「私で役に立つことやったら、持って行ってでも役立ててもらわんなのに」と言うのと、喜んで、その青年は持って帰えりましてん、今ごろ、どねんしてますやろか。」と言うと、その若い衆が「もう隠せません。実はそれが、私だったんです。きょう、それも返しに来ましてん。おかげでこんな元気になりました。」というて、耳をお返ししますね。

と、その瞬間、その青年が金色に光り輝いたかと思うと、観世音菩薩の姿になって、「人に知らすな、これこそはこの山の主」と言うて姿を消されるんです。

それが三輪童子という話で謡曲にあったとどこかの本で読んだことがあります。

(雑誌大美和による)

△金の鎧の落武者

(三輪)

昔、三輪に平等寺というのがありましたんや。

そこへ、金の鎧をつけた大將軍らしい落武者が来やはったんやと。

寺へは武士は入れられへんで、坊さんが、頭を丸めさしてかくまってやらはってん。

そこへ追っ手の武士がやって来てな、落武者が来やへんかったかと尋ねやはんねと。

「ここはお寺やさかい。そんな士さんはいやへん。あんたかて士さんやから、ここにいててもろたら困る。早う帰っとくんはなはれ。」

と言わはったんや。その様子をな、さっきの落武者が味噌汁すすりながら、じっと聞いてやはってん。

いくさが終わって、この士さんが国へ帰らはってんけど、毎年、この寺へ米四十石、

行列作って届けやはってんと。その土さんというのが関ヶ原の戦いで破れやはった島津義弘というて薩摩の人やってんと。

(大和の伝説より)

五十一 松卸媛命

(茅原)

神武天皇が即位をされる前年の八月十六日のことです。

正妃がなければ、天皇の位に付けないということもあって、美しい正妃にふさわしい娘を広く捜されました。

九月二十四日、容姿端麗な媛踏鞴五十鈴媛命を見出し、正妃としてめでたく結婚されたそうです。

その五十鈴媛の家は狭井川の辺にあり、そこを訪れて一夜を過ごされた喜びの歌が残っています。

葦原のしけしき小屋に

萱疊 いや清敷きて我が二人寝し

芦原の美しくはない家ではあったが、萱で編んだ敷物を、いよいよ清らかに敷いて、若々しいすがすがしい媛と一夜を共にしたんだ。

その五十鈴媛命のことなんです、大久米命が天皇に推薦申し上げるのに、次のように奏上します。

「この美しい媛女は神の御子でございます。そのゆえんはと申しますと三鳥溝咋（みぞくひ）の娘で名は勢夜陀良比売（セヤタラヒメ）と言って、その容姿は美麗なこと他に例を見ないくらいでございます。

ですから、三輪の大物主命さまも心をまどわされたくらいでございます。

勢夜陀良比売がある時、便所に行かれました。この家のトイレは溝流の上に作られて、川屋というものだったのでございましょう。

大物主神は丹塗の矢に姿をかえて、川上から流れ下ってその美しい媛の大切な所（富登）をお突きになったのでございませう。

なにぶん、用便中のこと、心もくつろいで安心しておられた時でございますから、突然のできごとに周章狼狽されて、その丹塗の矢持つなり、自分の部屋にお隠れになったのでございます。

だれの仕業かは判りませんが、顔から火が出るようで、恥ずかしく涙さえ流れてきたのでございます。

そうすると床の所に置いた丹塗りの矢が麗しい男の姿におなりになり、二人は睦み合うようになり、生れられた娘さんが、「富登多多良伊須須岐比売命」と申し上げるのでございます。

「ほとたたら」では名がはばかりますので後に「比売多多良伊須須氣余理比売」と申し上げ、神の子としてお生まれあそばされただけありまして、母にもまして美しいこと、この世の人とは思われないくらいでございます。

正妃（大后）としてこれ以上ふさわしい人はございません。」
そのお方を五十鈴媛命とも言うのです。

（古事記より）

なま賢僧都 （玄寶庵）

（箸中）

玄寶僧都は、姓は弓削氏で河内の国の人で、南都第一の碩徳で天下無双の有識者だっ

たそうで、山科寺（興福寺）の生活を好まなかった。特に道鏡と同姓であるのを気にされ、重んじられるのを嫌って、桓武天皇の頃この地に隠棲して修業されていたそうです。

桓武天皇不予の時、祈願して靈驗のあったので世に信賴されるようになったのでした。

大同元年（八〇六）大僧都に任せられるのですが、固辞して、

三輪川の清き流れに洗ひてし

衣の袖は更にけがさじ

と、歌を残して備中阿哲郡の湯川寺に住まわれたようです。その間、渡し守になり、衆生を助けられた話があります。また、伯耆の国に阿弥陀寺を建立されたとも言われ、弘仁九年八月、八十一才（八十五才説あり）でなくなられたと言われています。

その玄資僧都が玄資庵に住まわれ、仏道の修業に専心されておられている時に、毎晩、椀と鬺伽の水を庵に運んで来る里の若い女人があったのです。

山田もる僧都の身こそ悲しけれ

秋果てぬれば訪ふ人もなし

という晩秋の寒い夜のことでした。松風が打ちしぐれて懸け樋も苔むして静かな水音が聞こえてくるだけでした。

その晩も閻伽の水を供えに来てくれる里の若い女人がやって来ました。

玄奘僧都は夜寒むを憐れんで、女人の乞われるままに、僧都の法衣を与え、住まいを聞くと、

我が庵は三輪の山本恋しくば

訪らひ来ませ杉立てる門

と歌を詠んで消え去ってしまったのです。

不思議に思いながら、のちに三輪明神に來ますと、大杉の枝に例の法衣がかかっていたのです。

近づいて見ると法衣の裾に金泥の文字で、

三つの輪は清き清きぞ唐衣

来ると思ふな取ると思はじ

千早振る神と願ひの有故に

人と値遇にあふぞうれしき

と書かれていたのです。読み返していると三輪明神の声がし、女神の姿を現わして、里の女人と思っていたのが、大物主神の化相であったのがわかったということなのです。

（発心集、謡曲三輪による）

笠石甘茶

（箸中）

倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）は、大物主神の妻になられた方です。

百襲姫のもとに、常に昼はお見えにならず、夜だけやって来られる通い婿がありました。

百襲姫は、ある日通い婿に言いました。

「あなたは常に昼は御姿をお見えになりませんので、はっきりその美しいお顔を見ることができません。どうか、ゆっくりされて朝までいて下さいませ。そして美麗な御顔と威厳ある御姿をこの目でゆっくり見とうございます。」

大神は答えて、

「お前の言う通りだ。それでは我は翌朝、お前の櫛箱の中に入れていよう。

どうか我が姿を見て驚かないでくれ。」とおっしゃいました。

この時、姫は心の中でどうもおかしいと思われました。

翌朝、朝明けるのを待ちかねて櫛箱を開いて見ますと、まことに美麗な小さな蛇がおりました。

その長さ太さは着物の紐のようでした。

それを見て、自分の愛していた男が小さい蛇であったと知るや驚いて大きな声で叫びました。

大神は恥ずかしく思われ、突然人間の姿になって、おっしゃいました。

「お前は、あんなに言っているのに大声を立てて、我に恥ずかしい目に合わせてくれた。おかげで二度と合うことができなくなってしまった。」

大神は大空に向かつて、三輪山の方へ姿を消されてしまわれました。

百襲姫は、雄々しい大神の後姿を見て涙を流されました。そして二人で過ごした幾晩もの楽しい思い出、彼のやさしさを思い出され、はしたなくも相手のお姿に驚いた自分のつたなさを深く後悔されました。

姫は、自分の体から力が抜けてしまうのが感じられ、その場に泣き伏してしまわれました。

泣けば泣くほど悲しみが、つのるばかりで、とうとう大神が、直接お触れになった、愛して下さった大切な所を箸で突いて死んでしまわれました。

それで姫を大市に葬りました。

時の人は、その墓塚を箸墓と申し上げました。

このお墓は、昼は人間が作り、夜は神様が百襲姫を哀れんでお作りになったとか申します。

二上山の向こうの大坂の石を手輿で遠路はるばる運ばれたと伝えられています。

崇神天皇の治世十年九月のことでありましたとか。

(崇神記)

※ ※ ※

箸中に箸中長者がおったそうですな。

今でも金持ちが多くて、立派な家がたんとありますけど。

その長者さんが、「金のなる木」を持ってやほったそうです。

お金がたまつて、たまつて、うんざりしてられたそうです。

それで、その長者が考えやはったんですわ。

「三度三度に使う上等の黒漆のらでんの箸を捨てると、少しは、お金も減るやろ。」と考へたんでっしゃろ。もちろん、家族、下男、女中に至るまで、捨てさせたのですさかいに、何年も経たないうちに、あのような「箸の山」ができてしもうたんですわ。そんなことやつてさかいに箸中長者も貧乏にならはったということですよ。

その箸の山が、今の「箸墓」だということですよ。

普通、私らでもそうですけど、一人一人の箸箱があつて、何年も何年も大事に使つたもんですわ。普通のうちではね。

海杓柵榴市 (二) (金屋)

影緩

仁徳天皇の皇系から、こんな極悪非道の天皇が出るとは、予想だにしなかつたことでしょう。その武烈天皇がまだ皇太子の時のことです。

妊婦の腹を裂いて胎児を見たり、生爪をはいでその手で芋を掘らせたり、人の頭の

髪を抜いて、木の上に登らせ、木を切り倒して殺したり、弓で射殺したり、池の桶の穴に人を吸い込ませ、ようやく外に流れ出た所を三つ刃の刀で刺し殺して喜ばれるという悪のことごとくを尽くし、ぜいたく三昧をされたのでした。

ですから、仁賢帝の皇太子と言うだけで、国民は震え上がり、怖れおののかないものは一人もおりませんでした。

父、仁賢帝がなくなられた後のことです。

皇太子は物部麩鹿火大連（あらかひのおおむらじ）の娘影媛を妻にしようとされ、仲人を立てて影媛の家に行かせました。

その頃すでに影媛は大臣平群の真鳥臣の息子鋪（しび）と相思相愛の仲で、ねんごろにしておりました。

皇太子は、一度言ひ出されると聞き入れない恐ろしい方であることは、伝え聞いておりましたが、自分にこんな災難がふりかかって来ようとは、夢にも思っておりませんでした。

影媛は泣きわめくやら、父の大連は娘を慰めるやらで、家中が皆なおろおろとしておりました。

大連には、次の世継ぎが自分の娘から生まれることにもなるので、心の隅には、うれしくも思わないこともなかったのですが、何を言っても相手が相手、どうするわけにもいかず、娘をなだめるやら、すかさずやらして、ようやく娘の口から「海柘榴市でお待ち申し上げます。」という返事を取りつけ、使いの人に申し上げましたが、大連は娘の心の中を察して涙が止めどもなく流れ落ちて来るのでした。

自分の命ぐらいは惜しいとは思いませんが、娘のせっぱつまった気持と親の立場を理解してくれたことだけに、なおいとおしく思えてくるのでした。

太子が、さっそく約束の場所へ行こうとして、鮪の父の平群の真鳥の臣に使い出して、「馬を用意せよ。」と伝えました。

皇太子と平群真鳥臣とは馬が合わぬといいますが、中には、自ら天皇になろうという野心を持っているという者もあるほどでした。

「宮馬はだれのために飼っていますでしょう。あなた様の思うように御利用下さい。」と言っているながら、馬の用意を渋るようすです。

太子は、たいそう御立腹でしたが、顔には出さず耐えていられたとか。

とにかく、約束の場所に太子が行かれますと、折から秋の収穫を予祝する歌垣が開

かれ、多くの男女が集まっておりました。

歌垣、媛歌会は、市場や町で行われる歌舞の集まりで、青年男女が見初め合い、歌で心のたけを述べ合い、それが求婚の行事とさえなっております。

太子は、その歌垣の人中に混じられて影媛の袖を捕らえてお誘いになりました。

その時の影媛の様子たるや、皇太子に従って行きながらも、青年男女の集まりを振り返り振り返りして、とまどいの様子を見せられたのですが、皇太子にはそんな心の機微など理解される様子もありません。

影媛は、愛する鮪に連絡しておきましたので、きっと鮪臣が来てくれるとは思っていたのですが、相手がのちに天皇になられる方でもありますので、鮪臣がはばかられているのではないかと、一瞬疑いさえするほどでした。

影媛には長い時間のように思われました。

今に鮪臣が現れて、事情を皇太子に説明してもらい、諦めてもらうことができたらと、鮪臣を心頼みにしておりました。

しばらくして、鮪臣が来て、皇太子と影媛の間に割って入られました。

突然のことだったので、太子は、影媛の袖を放してしまわれました。

影媛は、窮屈さから解放され、ほっとした気持になりました。

鮪臣の顔を見ると、昂揚してにっと微笑まれて、その男らしさに頼もしいお方という印象を強くしました。

それに引き比べて、皇太子の青白い顔、きよろついた目、時々ひきつる頬、全て陰険な心を示しているようで、媛の心の中を冷たいものが走るのを感じて、思わず身震いをさせられるほどでした。

皇太子は振り向いて、きっと鮪臣をにらまれました。唇が震えて声にならなかったのでしょうか。ようやく歌われました。

潮瀬の波折見れば

遊び来る鮪の鰭手に

妻立てり見ゆ

潮の流れる早瀬の波の高く打ち返すのを見ると、泳いでくる鮪のそばに、私の女が立っているのが見える。

鮪は答えられました。

臣の子の八重や韓垣（からがき）

ゆるせとや御子

私の幾重にも立派にかこんだ垣に、勝手に入らせよというのですか、太子よ、影媛はすでに自分のもの、割り込みはできない。

太子は相手を威嚇して歌われました。

大太刀を垂れ尻き立ちて抜かずとも

末果しても会はむとぞ思ふ

私は、垂らしている大きな太刀を抜かなくとも、将来はきっと、自分の考えを實現して、影媛を自分のものにして見せる。

鮪臣が答えて、

大君の八重の組垣懸かめども

汝を編ましじみ懸かぬ組垣

大君は影媛を守る立派な組垣を作りたいだろうが、汝には編めないだろう。立派な幾重もの垣が。

また、太子は歌われました。

臣の子の八節の柴垣下動み

地が震り来ば 破れむ柴垣

臣の編目の多い立派な柴垣も、見かけは立派だが、地鳴りがして地震がきたら、すぐ壊れてしまうようなものだ。

琴頭に來居る影媛 玉ならば

吾が欲る玉は眞白珠（あわびしらたま）

琴の音に引かれて琴のそばに神が影となって寄り添っているという影媛は、もし玉にたとえるとするなら、私の一番好きな玉、あわびの眞珠のようだ。

眞珠に例えられて、一瞬うれしく感じたのは、女心のあさましさかも知れませんが、でも、この険悪な空気の中では、もうどうにでもなれという気持ちがあったのかも知れませんが、愛する鮪臣を頼る気持ちが影媛を大胆にさせたのかも知れません。

はっきりと自分の気持ちを歌でお返ししようとしたのですが、鮪臣は、女の身で、はしたない言葉を言わずにすむよう、影媛に代わられてお答えになりました。

その鮪臣のこころ遣いも影媛を感動させたのでした。

大君の御帝の倭文服（しつはた）結び垂れ

誰やし人も相思はなくに

大君の帝の倭文織の布を結び垂れている。

そのたれ、誰かほかの人などに私の心は傾いてはおりません。鮪だけを思っているのですよ。

太子は、はじめて鮪がすでに影媛と通じ合っているのを知り、ここへ来る時の父親の平群の真鳥臣の馬の一件であり、息子の鮪臣の今の態度といい、皇太子の腹の虫がおさまらず、顔面まっ赤にして怒った。

この夜、側近の大伴家村連の家へ太子自ら訪れ相談され、大伴連は数千の兵を率いて奈良山で鮪臣を殺されたのでした。

その時、鮪臣は石上の影媛の家を訪れていられたのですが、その急を聞き、物部家を事件に巻き込みたくないという心使いから、奈良山まで難をのがれられたとか。

影媛は、その時あとを追ったのですけれど、鮪臣はすでに息絶えておられました。気が狂ったように泣き叫び、その場に突っ伏してしまいました。

そして歌った歌に、

石上布留を過ぎ、薦枕高橋過ぎ、物多に大宅過ぎ 春日春日を過ぎ 妻隠る小佐保を過ぎ、玉筒には飯さへ盛り 玉碗に水さへ盛り泣き沾ち行くも 影媛あはれ石上の布留を過ぎ、高橋を過ぎ、大宅を過ぎ、春日をすぎ、小佐保を過ぎて、美しい食器には亡き人へ供える飯まで盛り、美しい椀に水まで盛って、泣き濡れてゆく影媛は全く可哀想だ。

影媛自ら歌を作られる心境ではありませんでしたが、鮪の遺骸に、「この影媛が、かわいそうです。こんご影媛はどうすればいいのかお教え下さい。」と取りすがって泣く様子が見る人の哀れをそそり、道行きの送葬歌になったのかもしれない。

いつまでもそうしているわけにもいかず、遺骸を地中に埋め申してのち、「くやし
いことよ、私は今日、最愛の夫を永遠に失ってしまいました。」とよけいむせび泣かれて、ほどこす手だてがない状態でした。

供の者に抱きかかえられて、鮪と最後のお別れをされました。

あをによし乃楽（なら）の谷に鹿じもの

水漬く辺隠り 水灌く

鮪の若子を漁り出な猪の子

奈良山の谷間に鹿のように水びたしの所で死んで、水を浴びてい鮪の若子をあさり出すようなことをしてくるな、猪よ。

せめてやすらかに眠らせてやってほしい。
と歌われました。

のち、鮪臣の父の真鳥臣も皇太子の命令で焼き打ちにあい、煙りは雲のごとくであつたとくことです。真鳥臣だけでなく、一族全て殺されてしまわれました。

こんな理不尽なことをなさるのは、身によろしくありません。

帝位につかれて、武烈天皇とされましたが、後継ぎが絶えてしまうことにもなつてしまいました。

海柘榴市 (二)

敏達帝十四年(五八五年)三月の有名な排仏段釈の事件の時、物部弓削守屋大連は、中臣勝海大夫と共謀して、飛鳥の寺々の仏塔を切り倒し、火をつけて仏像仏殿を焼き、焼け残った仏像を難波の堀江に棄てさせました。

そして蘇我馬子の下にいた司馬達等の娘で、出家して善信尼といいますが、それら

の尼僧を捕らえてその法衣を奪って海柘榴市の馬舎、馬屋館に閉じ込めたり、尻や肩を鞭打って群衆の面前で見せしめにしました。

その時、大三輪逆君ら、佐伯連御室も加わっていたと思われます。

その時、帝も大連も天然痘にかかり、身を焼かれ、打ちくだかれる死の苦しみを味わわれたということです。

海柘榴市 (三)

推古天皇十六年(六〇八)遣隋使小野妹子が帰国した時、唐客裴世清など十二人を、鏑騎(かざりうま)七十五頭を連ねて、この海柘榴市の町で迎えたということです。

推古天皇の別荘海柘榴市の宮も近くにあり、舟運の終着点であり、陸道の交わる文字通りの八十の衝でもありました。

(日本書紀による)

丑の時参り 祈り釘

(芝)

○今から二十年もなるでしょう。

村の芝の春日神社へ、丑の時参りがありました。

ある女が、男とともに寂しき所に住んでおりました。

夏の事です。村人が田に水を入れるため、夜半途中において、この女を見ました。頭に三徳、ローソクを立てて行くのを見ました。

昔より他人に見られたら、この願いが利かないと言われています。

案に違わず、まもなくその女は首をつって死にました。

○箸中の国津神社の近くへ、芝のある人が娘を連れて一緒に暮らしていました。

この男はある箸中の財産家の使用人でありましたが、そこで女中をしている女と一緒にになり、芝より来たが、財産家の子供は放り出した女に未練があり、遂にやるせなく、神社の檜の木に祈り釘を打った。

最近、芝の春日神社の社前にある大木の杉の木に五寸釘が、たくさん打たれ、上の釘に縄が掛かっていたこともあります。

(芝、稻藤正二氏による)

弘法大師の井戸と作物

弘法大師が粟殿へ来て、えらいのどが渴いたんやそうな。水がなかったんで、大師さんが、錫杖の先で、地面に輪郭をかいて、里人に掘らしたんが、「粟殿の井」やと。また、お布施をもろて、お礼に村で一番不自由なものをお返ししようということになって、一晩で掘らはったんやそうや。

※

※

※

全国行脚の途中、ここで水を求めやはったんやが、美しい水がなかったんで、ええ水湧くように呪術をかけた八つの井戸、それが八井内という地名にもなったんやそうや。

また弘法大師が来て掘らはった大井戸があります。井戸の下流に芹が沢山あるんで芹井というて、世の中に変事がある時は、芹に異常な兆候があらわれるいう「芹井の大井戸」があつて地名にもなつてます。

日本三文殊の一つの安倍の文殊さんの關伽井窟の古墳の玄室の中央に弘法大師が作らはった不動尊の石像がありますやろ。

その前に関伽井があつて、きれいな水湧いてます。「知恵の水」いうて、あの水で墨すつて書いたら、字が上手になりますねや。やっぱりお大師さんの力でっしゃるか。

ほかにこんなんもありますねや。

大根を引く老婆が、のどかわいたはる大師さんに、大根をやりおしみしやはつて、そんなんやったら、粟殿の大根はみな細て、苦い大根にしたると言わはつて、粟殿の大根はみなにごなつてんと。

※

※

※

粟原の氏神さんの境内のかやの実やけど、ほかのとちごて針の穴をあけたように黒い点がありませんねや。

村人が厚いもてなししやはつて、そのお礼や言うて、持ってたかやの実をくれはつて、食べんのもつたない言うて、植えやはつたんが、あの大木になつたんやと。もちろん、くれやはつたんは弘法大師です。

※

※

※

昔、ひとりの旅僧が粟原を通らはつて、村人がありあわせのときび団子の入つたお

つゆを差し上げやはってんと。そしたら、

「この村には、どこでもときびができるようにしたる」と言わはってんと。

まいたら、ええときびができてんと。

ときび言ても、今頃の子知らへんやろけど。

これらは、いずれも、大師信仰の広がりによって、後に作られたものと考えられる。また大師の井戸は、桜井だけでなく、数えればきりがない位である。作物については、柿、桃、芋その他、食べ物のちまきにまで及んでいる。

（桜井町史 続編、郷土、風俗誌、大和の伝説による）

△金鶏嶋に伝説

（東光寺跡）―近鉄の変電所の西に「磐根」というところに、昔、東光寺があつて、その井戸のところで金の鶏が出て来て鳴く。また、

十里行って、一里もどれは黄金千両、

埋みおきし、磐余山 東光寺山

と、三回歌うと黄金の鳥がでてきて鳴く。

(外鎌山) — 忍坂の外鎌山、防戦した玉井西阿公が、最後に及んで大事な宝物、純金の鳥を埋んだ。

金がほしくば、外鎌の山の

三葉うつぎの根を掘りやせ

という俚謡さえある。

(高田の鶏鳴き石) — 安倍高田の植松を登りつめた高田の三つ辻の前の大きな自然石の上に立って鳴く。

(出屋敷の椀山) — 赤阪古墳の東方に椀を伏せた形の山の上で、金の鶏が鳴いた。

(慈恩寺のがんから塚) — 慈恩寺の小字城島の田の中の小さな丘になった塚の上で。

それがいずれも旧正月の元日の朝に毎年鳴いたといわれている。

（カラト古墳）―文殊さんの上のくさ墓古墳に石棺ございますね。石の長持ち言うてね。

あこには金の鶏が入っとなね、元日の朝だけ鳴っこんねいうて、元旦だけ鳴っこんので、あいは中にすっこんどるだけで、でよらへん言うて。

やっぱり、高貴な人のお墓やったから、大事なものが入ったたんですやろ。

だれかとんに行ったんやろ。入ったったことを金の鶏として言うてんねやろと思いません。

そんなこと言うて、大きなやらしてもらいましたんや、わたしらは。

（米田富恵）

（神の木）―（大福）

明治の末まで小さい塚があり、老樹があり、開墾のおり、古剣が出たとも言う所に黄金の鳥が鳴くという。

（竜谷長者屋敷の井戸）――（竜谷）

その長者屋敷の下の藪に井戸があつて、金の鳥が鳴いたという。

（黒崎、山岡老女）

（黄金塚）――（滝倉）

滝蔵神社から少し下がつたところに黄金塚というのがあつて、

「黄金を埋めてあるさかいに、村が貧乏して食べられんようになったら、ここを掘つて黄金を出せ。」と昔からいい伝えがあります。

いずれにしても、金鶏の鳴くと言うのは、必ず旧正月元旦の朝のみに鳴くことになっている。何か崇りのある所、墓などに關係が深いと考えられる。なお、埋めてあるという所から、宝物が出たためしがない、全国的に念のため。

地道に働くが、大事なことです。

（桜井町史 続編、郷土等による）

お国自慢

(地名唄いこむ唄、名所唄)

○三ッ山言葉にサンうつな。(大和言葉にケチつけな。)と当地の言葉を自慢する。

○多武峰談山神社は、関西日光として自慢した。

○安倍の文殊は知恵文殊として自慢する。

○外山にある鳥見山は、鳥見山の靈時であると確信して自慢する。

○この付近町村全体は、最も早く開けた土地だとして自慢する。

○昔の城島村は、米産の反当たり全国一だと、土地の人は自慢する。

○桜井、城島の桧織は外国への輸出品として自慢した。

（桧織は、杉の白身をうすく削り、こよりにして、色を染めて花ござ等にした。）

◎童謡・地名よみ込み唄、名所唄

○多武峰の雀どん、ここらへうせて、粉食で粟食てポー。

○戒重かごかき、横内よめり、仁王堂にぎりめし、箸にさいてコロコロ。

○三輪でとと（魚）買うて、桜井で酒飲んで、河西でこけて、谷でたたかれて、長門で泣いて、八丁で走って、阿部であまい（菓子、あめ）買うて、生田で落とした。

○新堂・大福・上の庄、中にちゃんぼり岸の上。

○八十八軒、長門は九軒、阿倍の文殊さんは四十九軒。

○生田大倉の京さんは、二百五十円の金ゆえに、つしへ上って腹切って、はらわたとんで出て、キュッキュッキュ。

○高家の寺子、朝早う起きて、親の銭ぬすんで、綱買うて食ろうて、のどへ骨たてて、キヤアキヤアぬかす。

○音羽山から朝立つ霧は、やがて陽がさしや、すぐ消える。

○えらいことした出雲が焼けた、三輪の素麵ちやちやむちやく。

○初瀬は照る照る、黒崎やくもる、中の出雲で雨が降る。

○初瀬であかいのは、紅屋か鳥居、またもあかいのはなで仏。

○初瀬の観音さんに振袖着せて、奈良の大仏さんを婿に取る。

○初瀬の舞台から化粧坂見れば、お伊勢詣りが笠さげて。

○初瀬の廊下は、一丁二丁四丁五六丁もあれば、口説話は残しやせぬ。

○穴師よいとこ、密柑に茶どこ、まだも素麺、芋どころ。

○三輪の明神さんは七巻半よ、巻いてござるよ三輪山を。

○わしの思いは三輪山思い、いつも育々松ばかり。

○三輪の馬場先、掃かいてもきれいや、茶屋の女のすそで掃く。

○三輪の馬場先、広いようで狭い、横に車が二丁たたぬ。

○遠田出ぬけて、檜垣で逢うも、太田心は大豆越や。

○太田心は、辻草川で、キリきりと巻の内。

○何と云うても車谷は都、下の粉引きの袖を引く。

○穴師通いは玉の山こわい、むかい下され鳥居まで。

○町は町じゃが、芝村の町は油やも有りや、茶屋もある。

○茅原素麺どこ、車谷粉どこ、そばの穴師は密柑どこ。

(風俗誌、三輪町史、桜井町史、郷土より)

迷信

○八月十五日に月に供えた芋を漬物にしておいて、歯痛の時、これをすり、頬に付けると良い。

○桶、籠を頭にかむると身長が伸びない。

○鍋蓋の上にて、物を切る時は、手をきる。

○夜の昆布は、見のがしならん。

○朝の蜘蛛は敵に似ても殺すな、夜の蜘蛛は叔母に似てても殺せ。

○夜爪を摘むと鷹の爪になる、親の死に目に遇わない。

○夜、新しい履物をおろすと不吉だ。

○夜、火を弄ぶと寝小便をする。

○火事の時、牛を焼くと縮み毛の子ができる。

○夜、笛を吹くと蛇が来る。

○着物を新調した時、家の心柱にて衿をする時は衣服に不自由しない。

○流星の時、袂のつぼを持つと裁縫が上達する。

○便所を清潔にする時は、奇麗な子を産む。

○草履をきれいに作る者は、きれいな妻をめとる。

○女が卵の殻をまたげる時は、子宮病を病む。

○足の親指より、次の指のほうが長い時は、親より出世する。

○手の小指の爪を長くする時は、記憶よし。

○子供を幾人産んでも育たない時は、子供がみな育っている家三十三軒から布片を集めて着物を作り、破れるまで着せると育つ。

○一月一日の午前二時頃に杓子に餅一重を入れて、人目にかからぬ様にして、大川に流し、振り返らずに帰ると癩は必ず治る。

○妊娠の時、牛の糞をまたげると、前髪に、きりのある子供を産む。

○妊娠中、牛の手綱をまたげると十カ月以上懐妊する。

○正月の月に兎を食べると家が繁盛する。

○仏に供えた御飯を子どもに食べさせると記憶が悪くなる。

○仏壇の御飯を食べると言い負けする。

○女が糊を食べると嫁入りの時、犬に吠え付かれる。

○子無き者は、八月十五夜に産みのままの家の月に供えた芋の子を盗んで食べると必ず子供が産まれる。

○一月一日の朝の雑煮を三年間食べなかつたら癩は起こらず。

○針を失った時、そばにある物をなにか裏返すと、すぐ出てくる。

○出べその者は、山上詣りの新客のついで杖で三回へそをつくと治る。

○彼岸の中日に七カ所の石の鳥居を抱くと中風にかからぬ。

○しゃっくりになると「シャックリ川の水飲むぞと三度言つて水を飲むとなおる。

○獅子舞の頭に付けた紙を着物の揚げの中に入れておくと狐にだまされる。

○鍋蓋の上に銭をのせるとゼニムシになる。

○客を早く帰そうとするのは、かんざし、キセルを障子のさんの三つ目に門向けて置くと早く帰る。

○鳥居のかさに石をのせると男の子、下の段にのせると女の子を産む。

○目八ちこが出来ると大豆三粒をいって、井戸にはめ、味噌こしにてのぞくと治る。

○細道で蛇を見ると、「私の向こうの方に青黄まだらの虫おれば、ふけて通れよ。

ナムアブラウンケンソバカ」と三度言うと蛇が逃げる。

○道を歩いていて、身震いする時は、「きこくから吹き来る風は悪魔風、また吹き返すは伊勢の神風ナムアブラウンケンソバカ」と三度言うとすぐよくなる。

○酒の悪酔いした時は箒を枕にして寝ると酔いがさめる。

○客を早く帰そうとする時は、箒に鉢巻きをして、茶碗に水を入れて、その上に箸を十文字に置くと早く帰る。

(桜井地方風俗調査会編、風俗誌より)

この外にもたくさんあるが、面白いものを挙げた。現在でも我々の心の中に残っているものが多い。

もちろん、科学的価値は0にひとしいのは言うまでもない。

お伽話の部

こぶとり

昔、ある田舎に、大きなこぶをほべたにぶら下げたおじいさんがやあったんや。

もちろん、こんな頃は切り取るような医術もなかったんで、邪魔なもんやけど、しゃないのので何十年もの間、ぶらぶらとさして困ってやはったんや。

ある日のこと、山へ薪を取りに行き、日の沈むのも忘れていたんで、我が家に帰り着かんうちに日はとっぷりと暮れてしまおうたんや。

月の光は、おぼろやので、道をたどって行こうとするのやけど、道がわからへんで、とうとうあきらめやはったんや。

「ええい、どうなとなれ。」と思て、道ばたの一軒のあばら家に薪を下ろして、「今夜はここで。」と覚悟しやはったんや。

なんぼ見渡しても人里の明かりの見えへんこんな一軒家のこと、夜が更けて来ると何となく荒涼寂寞として眠ることもでけへんかったんや。「ええい、一層のこと起きて一夜を過ごそ。」と思て、日頃自慢ののどを惜しげもなく張り上げて、おもしろい歌、知っている歌、でんぶ歌わはってん、家の梁の塵も踊り上がるばかりの大声で歌わはったんや。大声でおめいて、恐ろしき忘れようとしやはってんやろ。

こんな寂しい所には、昔からいろいろの妖怪が住んでると言うけど、案の定、夜が更けて来ると、妖怪が行き来してにぎやかなこっちゃってん。

ところが、この老人の歌う歌に驚いて通りがかりの妖怪どもが、いつとはなしに現れて来て、あんまり上手に歌うので、皆うっとり聞きほれていたんやと。

おかしげなかつこうの妖怪もいつとはなく、現れて来てんけど、別に害を与える様子もないのやけど、そんなんが取り巻いて、居並んでるのを見ると、老人もこわいや

ら恐ろしいやらで、ぞうっとしたんやけど、こんな所やし、妖怪の住むことぐらいはあたりまえのことや。かえって逃げたり隠れたりしたら、相手に弱みを見せることになるし、弱みを見せんように、やっぱり声高に、ええ歌やら面白い歌やらを、もう知ってるだけ歌わはったんや。

妖怪でも歌の心がわかるのか、あんまり上手やので、みんなしーんとして物音ひとつ立てんと感激した様子やったんや。

こねんして、一晩中歌い明かして、東の空がかすかに白んで来かけて、おじいさんはホッと安心しやはったんや。

妖怪どもは、「今夜はええ歌聞いてて、えろ短かったな。」とつぶやきながら、みな帰ろうとしたんやど。

その中の一番頭と思われる妖怪がな、さすが妖怪だけあってえらい顔しとってんけど、なんとなく愛想笑いをしてたずねてきたんや。

「おじいさんよ、どうしてお前はそんなに美しい声で歌えんのや。」

おじいさんは、こわがらんと、

「それはのお、大王も見えるように、わしはここに大きなこぶを持っている。これ

こそ、わしの声のためてある所や。」

と、答えやはったんで、妖怪は、

「それやったら、どうかそのこぶをおれに売ってくれ。」

というて、色々の宝を持って来たので、とうとう交換することになったんやど。

日の光が野山にさすと妖怪どもは、草の露とともに消えてしもうたんや。

老人は一人ほくそ笑んでいたんや。

「昨夜は、妖怪どもをしてやった。何十年もじゃまやったこぶは取ってもらえだし、難病中の難病やという貧乏病さえ治った。」とゆうて、薪も何も放ったらかして、急いで我が家へ帰らはったんや。

このおじいさんと同じように頬にこぶを持つ人が、町の中に住んでいたんや。

一日のうちにこぶがのうなったのを見て、不思議がってその訳を言えとせがんだんや。

「それじゃ、おれも妖怪どもを騙してやろう。」と、ある夜、あの野中の一軒家に

行つて、この人も自慢ののど、下手というわけやなかつてんけど歌いながら、妖怪を今か今かと待ってやはったんやと。

へたら、妖怪どもがすぐ聴きつけて、今夜も、いつかの晩の嘘つきいさんが来てやがると言うて、打ち誘い合うて来て、色々と歌を注文して歌わせたんや、ほいで終わりに、

「どうしてそんなに上手に歌を歌えるのか。」

と問うたんで、こぶじいさんは、「待ちに待った質問が、ほれきた」とばかりにまじめな様子をして、

「見える通りこの大きなこぶからあの声が出るんだ。」と言わはったんや。

そしたら、妖怪の大将が、カラカラと声高に笑て、

「さて、さて、この嘘つき爺め、おれは、一人の人間から騙されて、高い金出して、こぶを買い取ったんや。そやけど、これをほったへ付けて、さて歌おうとしたら、ええ声が出るどころか、かえって声の出が悪なってしもた。もうこのこぶはおれには用がない。お前の声の出す所やったら、これもついでにやろ。」というて、前のこぶのそばにもう一つ付けて、

「人間というやつは愚かなやつやお。」

と言つて、一同声高くはやし立て大声を上げて出て行ってしもうたということや。

(風俗誌より)

猿蟹合戦

猿と蟹とが、山の麓を歩いてた時に、サルが柿の種を拾て、蟹が握り飯を拾たんや。これを見て早く食べられ、腹の足しにしようと思つて柿の種と換えてくれとゆうたんや。

カニはいややと言わんと、自分の飯とかえて、サルの持つた柿の種を植えたんや。すると、すぐ芽を出して、その木は見る見るうちに見上げるように大きなり、柿の実がたんとなつたんやと。

そやけど、サルは木登りがうまいけど、カニはそうはいかんで、サルにこの実を取ってもらつたんや。そうするとサルは木の上で柿をひとり食らつて渋いのをカニに投げ与えたんや。そして甘いのを自分の腰の所にぶら下げるんや。

カニは木の下で、サルの投げた渋い柿がこうらに当たつて、怪我さされて、ようや

く穴に逃げこんだんやけど、その痛みが、たえられへんほどで、とうとう起きられへんようになってしまたんや。

そのカニの親類や妻や子供が、このことを聞いて、サルのおんまりな悪さぶりに驚くやら怒るやらでとうとう兵隊（軍兵を記す）を連れてサルに仕返しをしようとしたんやけど、サルの方はサルの方でたんと眷属を連れてやって来たんや。

相手の勢いには、とうてい勝てへんということになって、憤りがますますつのるばかりやったんやけど、ひとまず、おのおのが穴にもぐって相談することになったんや。その時、カニの穴に白、升、蜂、鶏卵、海藻らが訪れて来て、色々計略をたてたんや。

まず、カニの方からサルに和睦を申し込まそうということになったんや。

そして相談すんのに、サルの王さんをカニの穴に誘うて、来てもらったんや。

そのサルの王さんをいろいろのはたに座らしたんや。

サルは、いろいろな計略のあるのも知らんと火箸を取って埋もれ火を掻き起こそうとしたんや。へたら、ちょうどその時、卵がいろいろの中に隠れていて、パーンとはれて、毛皮の上から腕のところへ、ベタと付いたんや。サルは腕が焼きつくように熱い

もんやっつてに、驚いて、雪隠の水壺のとこへ行って、ふたを取って、やけどを冷やせと
とするんやけど、蜂が壺の近くにおって、サルの泣きっ面をきつう刺したんや。

サルは、蜂を払うことも、ようせんと、ますます大声を上げて、裏門から走り出よ
うとしたんやけど、海藻が、足にまつわりついて、すべるやらころげるやらで、えら
いこっちゃ。そしたら、杵が棚の上から落ちて来たんや。サルはあわてて表門へ走っ
たんや。そうすると、白は白で、表門の上から、ころげ落ちて、サル王の背骨を打ち
砕いてしもうたんや。サル王は、とうとう、ようたたんようになってしもうたんや。
その時、カニどもが、群がり集まって来て、はさみを振り上げてサルをはさみ、そ
の肉を食べて喜び合うたということや。

(桜井町・城島村・安倍村・多武峰村、風俗誌下参考)

